
Feelings of mind

朝倉梨華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Feelings of mind

【Nコード】

N2784J

【作者名】

朝倉梨華

【あらすじ】

鈴木楓は人間不信で、現実主義者。決して人とは真面目に接すこととは無かった。今日も当たり前で、色で例えると灰色なつまらない日常を過ごしていた。いつもと同じ”つまらない”日常なはずだった。しかし、空から落ちた雷に驚き、歩道橋の階段で転んでしまった拍子に、上を見れば未来、下を見れば昔、というよく分からない変な世界へ来てしまった。

そしてひよんな事から、神崎颯馬という男と暮らすか……？

第一章？【すべては必然的】（前書き）

少し文字を詰めすぎて読みにくいかもしれません；
そこはご了承ください。

第一章？【すべては必然的】

「はあ……」

私、鈴木楓が深い溜め息をついたのは高校での日本史の授業だった。類に生暖かい五月下旬の風を肌を感じながら、先生の長々しい説明や雑談を聞いている。正直、私は日本史は好きじゃない。どっちかという嫌いな部類に入る。何故、現代の人が過去のことを勉強しなればならんのかと、不思議で疑問だ。

第二次世界大戦とか現在に近い歴史なら別に構わないんだけど、縄文時代とか弥生時代みたいなそんな昔のこと学んでも生きていく事に必要なのかなと時々思う。

日本史だけではないけれども、他の教科でもたまに疑問になる。例えば古文。現代にある文字さえ読めればいい。正しい日本語が言えていけば昔の文字を解読出来なくてもいい。

私は“昔”を学ぶ教科が大嫌い。昔なんて振り返っても良いことなんて何も無い。自分を成長させる為に知識を入れる為に“昔”を勉強するのだと思うけど、私はいまだに“昔”を勉強する意味が理解出来てない。

高校二年生ならばそろそろ何を目的にして、何故学ぶか分かっていなくてはいけない時期なのに、私は全く理解出来ない。そもそも理解しようという意思がどこにもないのだろう。とりあえず生きていければ、それでいいじゃない。ただ生きる為に勉強は必要だから、やらなくてはいけないだけ。

人は過去の、昔の苦みを学ぶから、強くなるという言葉聞いた事がある。

だけどそんなの嘘だ。

だって現に私は昔のままで、何も変わらない。大切なものなんていう物も無いし、守りたいと思える物も誇りもない。

悲しい気持ちは理解出来ても、心から笑える気持ちは分からない。

本気で好きになる人もいない。本気で信じられる人もいない。

私は自分の為には生きていない。何故なら、誰かが私を求めていると縋っていたいから、私は生きているんじゃないかと、ふと思うから。でもそれってある意味、結局は自分の為なのかもしれない。

「ふう……」

また自然と溜め息が出た。

どこかで聞いたんだけど、溜め息というのはこの疲れや悩み、憂鬱感や疲労感を誰かに伝えて癒してほしいんじゃないか、という人間の心理があるらしい。

だけど、私はもちろんそんな馬鹿げた事を考えて溜め息をついてるわけじゃない。ただ自然と、当たり前に出るものだ。まるで椅子を指差して「椅子は何で椅子なの？」と聞くくらい当たり前な愚問。

私はただこの長たらしく続く授業がつまらないだけ。先生の声が子守唄みたく聞こえて眠くて眠くて仕方が無い。だからため息をついている。

ただそれだけの事。

疲れてはいるけれど、誰かに癒してほしいとは思わない。そんなの自分で何とかしなきゃいけない。

早く授業が終わらないかと黒板の上の時計にちらつと目線を送る。

もう一分くらいで授業終了時刻だった。黒板にチョークで書かれた白い文字も全部ノートに写したし、これ以上先生が何か書く様子も無さそうだし、後は話を聞くだけで、もう終わりだ。

この日本史の授業で今日の最後の授業だから、帰るだけ。面倒くさい授業とは明日までおさらばだ。それだけで私は嬉しいわ。

眠くて仕方が無い状態だったからもう終わりかと思っただ途端に、先ほどと比べ物にならない睡魔が襲ってきた。まぶたが閉じそうなのを、首をこくりこくりと頷く動作をしながら絶える。

せめて終わりを告げるチャイムだけは聞きたい。私が睡魔に負ける前に早くチャイム鳴ってくれ。

頬をつねったり、頬をピンタしたり、眠気を覚ます方法を試してい

るうちに、目覚まし時計のように終わりを告げるチャイムが私の耳の中に木霊する。

ああ、やっと終わった。

「終わったー」

誰よりも早くといった気持ちで椅子から立ち上がり、大きく背伸びをした。一気に肩の力が抜け、疲れが取れて楽になる。

この瞬間がたまらない。この達成感がいいんだよ。うん。

一人で勝手に心の中で頷きながら、私は帰りの支度を始める。鞆に重たい教科書をぴしっと詰めて、整える。そして教室のドアから担任の先生が入室し、帰りのホームルームが開始された。

明日の持ち物、明日の時間割、明日の連絡などを言い、先生のちょっとした長めの話、当たり前でつまらない帰りのホームルームが終わる。教室の全員が立ち上がり、礼をする。

私は鞆を肩に担いで席から離れようとした。だけど、そこで不意に後ろから声がかけられる。

「ねえねえ、楓！ 今日さ、カラオケ行かない？」

後ろの席にいた女の子の友達からの遊びのお誘いだ。

でも、今日はあまり行く気にならない。いや、暇なだけだよ。たまたま暇なだけで遊ぶ気分じゃない時つてよくあるじゃない？ 今はそんな気分だから。理由は不明だけど。

「ごめん……、今日は無理なんだ！」

両手を顔の前で合わせ、申し訳なさそうな表情を作る。

「えー、そっか……」

周りから見れば何でも無い極普通の友達同士のやり取り。

ただ何かが違うのは誰一人として私は皆の事を友達とっていいこと。私の理想の人間関係は広く浅い関係を保つ。

例えば見掛けは信じられる人かもしれないけど、もし心許して裏切られたりしたら立ち直れない。だから最悪の状況考えながら誰に対してもそう接している。そう接すれば深い傷を負わなくて済む。

別にむなしとか寂しいとか関係ないし、くだらない。それが昔の

私が学んだことだから。

人との関係は当たらず触らず。むやみに他人の心に入ってはいけないし、自分の心にも他人を入れてはいけない。

他人の心に入ってしまったって自分が傷つくのも怖い。そして他人に迷惑をかけて責められるのはもっと怖い。

だから私は……。

「じゃあね！」

私は笑顔で友達に別れを告げてから、急いで教室から足を踏み出す。廊下を歩きながら窓の外を見てみると、雨雲が広がっている。これは一雨振り振りそう。

簡単な天気予想をしながら下駄箱の近くの傘置き場から置き傘を手にする。傘が割りと小さいので靴やら制服が少し濡れてしまうだろうから、雨が降る前に自宅に帰りたい。

小走りで学校を後にする。でも、自宅から学校までの距離は遠いわげじゃない。なんと電車は利用せず、歩いて十五分で着くという、とてつもなく便利な通学路なのだ。走って十分。全力疾走で走れば七分くらい。

まあ、近いところがいいって話で地元の高校にしたんだけどさ。とりあえず高校うんぬんの話は置いて、早く帰ろう。まだ夕方だというのに空が薄暗く、空気も湿っている感じがする。これはマジで一雨振りそうだな。

最初は小走りだったはずなのに、いつの間にか全力疾走していて寄り道せずに家に帰ってきたので、あっという間に着いてしまった。しかも雨はまだギリギリ降り出しそうにもない。もう少し遅く帰ってきて良かったかも、と家の前で息を切らしながら後悔した。

「ただいま」

自分の家の玄関の扉をあけて、呟いたような小声を言い放った。私
の声がやけに玄関に響く。

いつもこの時間帯に家に親がいないのは珍しくない。むしろ親が家にいることの方が少ない。家ではいつもひとりでいることの方が多かったりするのだ。

少し家族構成について説明すると、私はお母さんと二人暮らしをしているから、お母さんがこの家を養わなければいけない。お母さんとお父さんはあまり仲が良くなって、何故か離婚はしていないのに別居中なのだ。私はそこらへんの話は詳しく知らない。

お父さんが今どこに暮らしているのかも分からない。もしかしたらお母さんは知っているのかもしれない。

私知っているのは、お父さんは小学校一年生の時に家を出て行った。そしてその日以来、会ったこともない。だから、かなり曖昧な記憶であり顔は覚えていない。

お父さんとお母さんは元々、共働きだったのだけれど、お父さんが出て行った事によってお母さんは私の為に、夜遅くまで働く事になった。

自分の為に、私の為に働いてくれていて、それだけでも感謝しなきゃいけないのに、私は小学生の頃はかなり寂しくて泣いてばかりだった。「ただいま」といつても返してくれない空しさ。ひとりでご飯を食べる寂しさ。小学生の頃はそのマイナスの感情がとても苦痛だった。

でも何回何回も回数を重ねれば、慣れていた。いや、無理にでも慣れてきてしまっていた。

夜御飯はいつも食卓のテーブルの上に置いてある。それならまだいいのだが、たまにお金だけがそこに置いてある場合もある。お金置いてある時は近くのコンビニへと向かい、買って食べる。それがどんなに寂しかっただろうか。どんなに誰かと一緒に食べる食卓に憧れただろうか。私は「普通の家庭」という言葉に憧れてただろうか。今でもまだその感覚は覚えているし、今でもそういう感覚になる事が多々あるのだ。

今日はまさに、さびしいという感覚に陥っている気がする。何故か

は分からないけど。

今夜の夜御飯は何だろう。少し元気なさげな重い足取りで、食卓のあるダイニングキッチンをドアを開けてのぞく。

「今日もお金……か」

食卓のテーブルの上には千円と五百円が無造作にぽつんと置いてあった。

最近、お母さんが作ってくれた御飯よりも、お金が置いてあることの方が多くなってきた。

それほど忙しいのだろうか、それほど大変なんだろうか、と考えるとともに申し訳なく、一人でいる事がさびしいと思う自分が腹立たしくなった。

私がいなければ母はこんなにも働かなくなっていたいいのに、何度もそう思った。悲しくなるばかりなのに、何度もそう思った。

何度も思っても、状況が変わるはずもない。だから私は、そんな状況でもお金を置いていってくれた母に感謝する事にする。悲しくなってしまう感情は、どこかへ行ってしまうように。

「……どうしよっかな」

お金を自分の財布の中に入れて、コンビニへおにぎりでも買ってくるかどうか悩む。正直、お腹はあまり空いていない。だけど夜な夜なお腹が空くかもしれない。こんな私以外誰もいない家にいても、何もすることがない。返ってさびしい思いをするだけだったら、コンビニ行って暇つぶしするほうが、よっぽど良いだろう。

財布を持って玄関に近づいてみると、雨の音が家中に響くような錯覚になった。ダイニングキッチンにいる時は気が付かなかった。雨が降り出していたことに。

やっぱりどうしようかと思った末、早く帰ってくれば問題ないと判断して、制服のまま財布と大きめな傘を持って、雨が降る外にへと外出した。

地面にはもうすでに小さな水溜りが出来ていて、予想以上に大量の雨が降っている。歩いていく道が濡れていて、転びやすいほどつる

つると滑りやすかった。

歩道橋とかがとくに滑りやすいのではないか。これから歩道橋を渡るので、気をつけようと足元に気を配りながら慎重にゆっくり歩いていく。

まさか転ぶとは思わないけど、もしかしたら転ぶかもしれない。何事にももしもこうなったら、と悪い意味で考えなければいけないからな。用心しよう。

自宅からコンビニまでは、歩いて十分ぐらいしか時間が経たない。歩道橋が途中あるけれど、歩道橋を渡らずに車道を渡るとさらに早い。だけど、歩道橋の近くの車道には横断歩道がないのだ。だから車の気配が無くなった頃合を見て、渡らなければ危ない。そんな自ら危険な事はしたくないから、私は歩道橋を渡る。

歩道橋を渡り終われば、すぐコンビニが建っている。

コンビニの傘置き場に傘をいれて自動ドアを通り、中に足を踏み入れる。

おにぎりの置いてあるコーナーに買い物かごを持って急いだ。コンビニとかのおにぎりってわりと美味しいものが多いんだよね。いつもはシンプルな鮭おにぎりとか、梅おにぎりだけど、今日は何か違う気分。オムライスのおにぎりなんてマニアックなおにぎりもあるし、丁度目に付いたからこれにしようかな。

迷いながらもオムライスのおにぎりを手に取り、レジに向かい千円札をだした。店員は私の手のひらにレシートと四百円を置く。

「四百円のお返しです。ありがとうございます」

コンビニの店員からお釣りをもらい、傘を持ってコンビニを出る。空は雨雲に覆われていて暗いというより黒い。まるで闇の中にいるみたいだ。一瞬、身震いする。闇の中に自分がいると思うと怖くてたまらなかつた。

早く帰りたい。家には誰もいなかったってこの闇にいるよりかは安心する。

雨で滑りやすい歩道橋を小走りでのぼっていく。行きは滑って転ん

だらどうしようかと思っていたのに、今はそんな事すっかり忘れていた。
早く帰りたい、ただそれだけの事しか考えていない。いつもならこんなに急ぐことはないのに。何でだろう。今日はいつもと何かが違う気がした。

歩道橋の階段を下る時にはもう走り出していた。危ないとは分かっていたても、ここにいる状況の方が危ない気がして胸騒ぎがしたから。転ばない限り、私の足を止めるものはない。

だが、空が急に光りだして遅れてから迫力のある音が聞こえた。太鼓のように空が鳴り響いている。

それは言うまでもなく雷だった。

私の足は止まってしまふ。

だけどそれは初めから決まっていたかのように、すべてが必然的だったかのように物事が始まっていた。

私はその太鼓ように鳴り響く空に驚き戸惑い、一段ずつ上がっていく足を踏み外していたのだ。私は階段から滑り落ちてしまっていた。まさかここで雷が鳴るとは思っていなかったから。

このタイミングで雷が落ちたのは何でだろう。
偶然なんだろうか。それともすでに私の運命として決まっていたのかな。

ただ分かることはすべてはここから始まったんだと

……

第一章？ 【すべては必然的】（後書き）

物語はこれからですね。

初投稿なのに、この小説は結構長く続いてしまっ予感です…

まあ、気長に見てくださると嬉しいです。

第一章？【すべては必然的】（前書き）

主に一話完結で話を進めるのですが、一話ごとに書く枚数が多いのです。

だから、一章ごとにおよそ3つぐらいに分けて書いていこうかと。そして早く更新せねばと思って、手直ししていません。ほとんど昔書いていた文章をそのままコピペしただけです。いずれ修正します。

第一章？ 【すべては必然的】

「……い」

声が聞こえる。それは私を呼ぶ声。どうやら私は、気を失っていたらしい。でも目が開けない。まぶたが磁石のようにくっついて開かない。これはどういう事なのだろう。

そもそも私は無事なんだろうか。いや、こんなにも意識があるから無事だとは思う。でも声が出ない。口も開かない。体も動かない。まるで金縛りにあったかのような感覚が私を襲う。

もしかしたら精神世界にいるのかもしれない。あまり信じたくはないけれど、体と心が繋がっていないのかもしれない。

……

そんな訳ないか。

先ほどまで体の痛みも何も感じられなかったけど、時間が経つにつれて少し全身が痺れて痛み出してる。でもきつと命に別状はないはずだ。

微かながらも誰かが私を呼んでいる気がする。だから私が今ここにいる場所は一応、世界の中なはず。

あえて考える事を避けていたけど、もしかしたらこの私を呼ぶ声は、天国からのお迎えかもしれない。天国のお迎えって三途の川じゃないんだね。私はてつきり三途の川を渡って死んでいくものだと思っ込んでいた。珍しい経験が出来て良かったじゃないか。

いや、全然ちつとも良くないと、時間差で気が付いたのは自分自身で無視しところ。私、無事じゃないんじゃない。命に別状ないと予想したけど、前言撤回。

ここはきつと天国なんだ。だから体も動かない。全部の不明な点は、私が死んでいるからで説明付く。

それはそれで悲しい。私は死ぬときは家族に見守られて、静かに息

を引きとる死に方が良かった。なのにこんな意味不明な死に方ではないよ。何が起こったのか、微妙に記憶が曖昧な中で死ぬには嫌だ。

「……………か……………」

透き通るような低めな声が聞こえる。聞こえる声は男の声？

少なくとも私には男の人の声が耳に響いている。天国のお迎えの人って男なんだ。私はてつきり小さな子供がいつぱい飛んできて、ラッパみたいな楽器を吹いて私の魂だけを空へと連れて行ってくれるものかと思っていた。またまた新たな発見をしたぞ。

でもその新たな発見した時には、死んでいくなんで……………。なんて悲しい性だ。

「……………して……………」

男の低い声は聞こえるのだけど、先ほどから全くと言っていいほど何も起こらない。

Why? 何故？

そんなの知らんがな。

もし本当に天国に連れて行くなら、早く連れて行ってほしい。これじゃあ、まさに生と死をさ迷っているみたいですよ。何か潔く死ねないと格好悪すぎる。

一体どうすれば、生と死の狭間で心の葛藤をする状況から抜け出せるんだろう。

夢ならば覚め……………

「おい！ しっかりしろっつってんだろ！」

「うわあああ！？」

耳元で大音量の音が聞こえて、勢いよく上半身を起こした。…………あれ？

「え？」

何が起こったのかよく分からず、とりあえず疑問符を付けた文字を

発する。

周りを大きく見渡すと、ブランコやすべり台に砂場といった見た感じ少々広めの公園っぽい場所みたい。

どこにいるかを確認し終わった後、私は自分がどのような状態になっているかを確かめる事にした。私はベンチの三分の一を占領して座っている。

今までここで寝ていたという事だろうか。

そしてあえて突っ込まなかったけど、私と同じベンチの端っこに男の人が座っている。

誰だろう。首をかしげながら私は目をパチクリと瞬きをしながら見つめる。

私が不思議そうに眺めている顔を見て、安心したかのように軽いため息をついた。

「ったく……お前何回も呼んでなのに返事しないし、死んでんじやねえかと思っただろうが」

この男の人は誰？

空はもう夜で暗闇に包まれていたから、顔はよく見えない。あなたは誰で、今まで何が起こっていたのですか。たったそれだけを言いたいのに、記憶が曖昧で混乱している。頭から記憶を探ってみても、何故か何もかもが曖昧で分からない事だらけ。

一体何が起こった？

物事を頭の中できちんと整理しようと、自分が覚えている記憶を思い出す。

階段から落ちて、生と死の狭間で心の葛藤し始めたのは覚えている。というよりたった今、思い出した。

だけどそれからが全く覚えていない。本当に何があったんだろう。ベンチに座っている場から考察をすると、私は座りながら気絶していたのかもしれない。

確か階段から落ちたはずなのに、外傷がないのはおかしい。私はてっきり天国へ行くのかとばかり思っていたから。今考えれば何で天

国へ行くのに、何故はつきりと意識あつたのか疑問だ。まあ、それほど混乱していたに違いない。

今更気が付いたけど、階段から落ちたはずなのに何で公園らしき場所にいるんだろう。歩道橋の近くに公園なんて無かったはずなんだけど。しかもこの公園、全然見覚えの無い公園だ。

公園の敷地内を見回した後、私は次に男の人を見てみる。結局、また先ほど思った同じ疑問が戻ってくる。

この男の人は一体誰？

私が目を覚ますまで声をかけ続けていて、ここにいてくれたのかな？何で？ それは私が目を覚まさなくて心配だったから。

人が死んでいるように眠っていたら、私も心配で仕方ないわ。だからきつとこの人も、そうだったのかもしれない。よく状況が読めないし、この人が一体誰だという疑問だけが一点張りだけど、とりあえずお礼を言わなくては。

だってこの人が私を呼び起こしてくれなかったら、このまま永眠してたかもしれない。

ちよつと恐ろしいかも。

「ご、ご迷惑お掛けしました。ありがとうございます」

立ち上がってお辞儀をしたかったけど、何故か腰が重たくてなかなか立ち上がることが出来なかった。仕方なく私は、ベンチに座ったまま感謝を言葉に表す。

その人は優しく微笑みながら、私の髪をぐしゃぐしゃと撫でた。髪の上から撫でられているのに、ひんやりとした冷たさと大きさを感じ取れる。大きくて冷たい手だけど、不思議と落ち着く。

「どーいたしまして。……立てるか？ 立てないなら手を貸してやるぜ」

男の人は立ち上り、気さくに受け答えをしてくれた。さらに私に手を差し伸べてくれる。

最近の若者は正しい日本語を使わないわ、礼儀もマナーもすっかりしていないわでチャラチャラしている人ばかりだと思ひ込んでいた

けど、結構しつかりと真面目で誠実な人っているんだな。少し感動やら関心をしながら、私は男の人の手につかまり立ち上がる。

「ありがとうございます。ご心配おかけしました」

「そんな事ねえよ。それより、ちゃんとひとりでお家に帰れるか？少しカチンと頭に来た。私を子供扱いしている態度に苛立ちが募る。確かにクラスメート達からは、童顔とか、チビとか見た目をボロクソ言われているけど、こう見えても高校二年生の十六歳なんだから、もう立派な大人だから。ひとりでも普通に家に帰れるっていうのに、こいつは「ひとりでお家に帰れるか？」ってなめてんのか。

私を呼び起こしてくれた事は感謝しているけど、それとこれとは話が別だちくしょー。

「帰れますー！」

「いいから。送ってやるよ」

何よこの人。

遠慮しているのに、しつこい。子ども扱いして失礼な人だな。私を小学生ぐらいの子供だと思ってるの？

私を馬鹿にしてんの？

確かに身長は並の人より少しばかり低いのは事実だし、私もそこは否定しない。しかも実年齢よりか幼く見える童顔で完璧、高校生には見えない。自分の容姿に対する最大なコンプレックスでもあるんだから、そんなことは本人が一番理解している。でも、小学生に間違えられるほどでも無いはず。この人、冗談で口走っている訳でもなく、真面目で悪気がなさそうだから余計にイライラする。

この頭に募る血の気を抑えようと、急いで公園の敷地から足を踏み出す。けど何故かそれでも後を追うように男の人は付いてくる。ストーカーかこいつ。

「だから、いいですって！」

「いや、送るつつつてんだろ」

「送らなくていいですって！」

何なのよこの人は。

さつき言った真面目で誠実な人って言うのは前言撤回する。この人は、ただの変態じゃないか。

夜道に点々とある電灯に照らされるたびに、男の人の真剣そのものの顔が見える。一体何で追いかけて来るのだらう。何故そんなに必死に追いかけてくるのかな。

私はとりあえずこの状況を謎を追及しなきゃいけない。だから、早く帰らなきゃ。というより一人になって、一人で考えたい。

だけどもさに、一人になりたいと思った瞬間、足がなぜか動かなくなり、言うことを聞かなくなる。ガクンと床にひざがつき、二本の足では体を支える事が出来ない。

私どうしたんだらう。何が起きているの？

膝がカクカク震えている。でもどこも痛くない。あれ？ 視界が歪む。

「おら、言わんこつちやねえ」

地面に倒れそうになったところを、さつきの人が支えてくれた。でも音が聞こえない。まるで耳が破壊されたかのように。私が意識を手放す前に、ふわっと体が持ち上がった。そして私は意識がなくなる……

目を瞑っていても、光りが差し込むほど明るい。直接は確かめていないけど、多分朝か、昼だらう。

睡魔が襲い掛かっている最中なので、目を開くのは嫌だけど手触りでどこにいるかを確認する。

感触はフカフカ。モフモフ。温度は暖かくて気持ちいい。

それから計算されてくる答えは、おそらく私は布団に寝ているのだらう。一体どこの布団なのだらう？

でもいつまでも寝ているわけにはいかないのです、私はゆっくりと目を開けた。

「……………」
しばらく自分自身の中で沈黙がおきる。えっと、何よ……。物事を単純に整理すると、先ほどの変態が私の横で寝ている。何で？ 何で？ この人は誰なの一体！ ていうかここはどこ！？ この状況で冷静にいられる奴がいたら、是非来て欲しい。変わってあげるから。

「……………」
男はかすかに声をもらしながら寝返りをうつ。この状況は少し精神的に良くないと判断して抜け出そうとするが寝ぼけているのか、何か私の腰に手が置いてある。何かこれだとまるで、抱きしめられている感じだった。あまりの驚きに声が発せなくなった私はどうしたらいいのだろう。これはまさに人生のピンチ。これは起きてもらわないと困る。がちり腰掴んじやってるから起こさないと離してくれなさそう。

「あ、あの……………離してください……………」
……………起きてよ。これもしわざとだったらちよつとアレだよ。私が大人身しくしていると思うたら大間違いだからね。後五分で起きなかつたら窒息させてやろうかと考え始める。

「俺、枕……………買ったんだぜ……………」
寝言を言いながら腰に回されてる手に力がこもる。というか五分ももたない。私を枕と勘違いしているのかもしれない。いや、完全にそうだね。全くさつき一瞬ここにおいて安心した私が馬鹿だった。こうなったら強行手段に移ることにする。私は男の頬をバチバチと強めに叩き始める。

「もしもーし！ 起きてくださいーい」
……………あー……………うるせえな……………。あ……………ああ、目が覚めたか？
男はかすかに目をあけると、私の存在に気付いてあの時公園で見た優しい笑みをうかべる。この腰の後ろにある手は何なのか、とか色々怒るところか、拍子抜けしてしまった。そしてびっくりしてしま

「は、はい……。あの、これは一体どういった状況なんでしょうか……？」

「おまえはどう思う？」

憎たらしい笑みを浮かべる。質問を質問返しされて戸惑ってしまおうし困ってしまう。人が質問しているんだから、ちゃんと答えて欲しい。この人どこまで本気なのか分からない。茶化しているのか、真面目なのかはつきりしてほしいのよ。

「質問に答えてください」

混乱を無理強いで押さえつけようと、自分でも驚くほどの冷静を戻した冷徹な声を吐く。

「ほお……わりと冷てえな？ 俺にそんな態度とっても知らねえぞ？」

また馬鹿にしたようにニヤニヤと笑う。それはこんな冷たい態度をとっていると教えてあげないよっていう意味だと感じ取れた。脅迫とも感じられる怪しい笑みに、苦笑いで対応する。というかやたらと「俺様」気質な人だな。

なんかこの人、変な人だけど別に危害を加えるとかいう人ではないっていうのは私でも分かる。さつきからセキハラ発言っぽい事しか言っていないけど、それは本気じゃなくて冗談で言ってるようなそんな軽さがこの人にはある。自分の考えもあまり宛にならないかもしれない。でもさつき安心したっていうのはあながち嘘ではないのかもしれない。そしてやっと私の背中にあつた手を離してくれた。助かった。精神的に落ち着けない状況だったし。

この状況と状態に焦っていた私は周囲を気にしていなかった。だから今になって辺りを見渡す。なんか私のおばあちゃんの家みたいな部屋なんだけど。床はほとんど畳で、ドアもふすまで絵に描いたような和風な雰囲気がある。

「あの、ここは……？ そしてあなたは……？」

「ここは俺ん家で俺は神崎颯馬だ。苗字では呼ぶなよ？」

何で苗字で呼んじやだめなの。年上の人だし、いきなり名前で呼んだら失礼だよ。だから神崎さんでいいよね。駄目って言われたけどいいよね。

「か、神崎さん……。私……」

「おい、お前は人の話を聞いてたのか？」

やっぱり駄目か。この颯馬っていう男に少し苛立ちがわきながらも私は笑顔の仮面を絶やさない。この仮面がなくなったら私が私じゃなくなるから。なのになさつきから取れかかるばかりだった。

「分かりましたよ。じゃ、颯馬さんで」

仕方がなく、この男の念に押されて仕方がなくそう呼ぶことにした。不本意ながらも男は嬉しそうに笑みを浮かべる。なんか見た感じやる気なさそうで、だるそうなのになんか……言葉では表せない真剣さがある。満面の笑みというわけでもなければ、無表情でもない。でも目がちゃんと笑っている人。私とは正反対の人だ。

「人に名乗らせといて、自分は名乗らないのか？」

そういえばそうだった。確かにそれは失礼だ。いつまでもこの人に「あんた」とか「おまえ」呼ばわりだと少し苛立つし、一応名乗るときですか。

「私は鈴木楓です。呼び方は……何でもいいです」

「んー、じゃあ楓な」

いきなり呼び捨てかい。でも別に変な呼び方じゃないし、何でもいって言ったからいいのかな。その前にこんな自己紹介よりもっと大事なことがある。まずはそっこのほうに話を戻したい。とりあえず着崩れしていた制服を整え、布団の上から立ち上がる。

「分かりました。あの、話があるんですけど」

「むしろそれが本題だよな、絶対。で？俺に分からない事はねえから言ってみろよ」

この場所では落ち着かないので、ソファとテーブルのあるリビングに移動する。この人と同時にソファに座る。まずいろいろ聞きたい事があるけれど、何から言おうかな。じゃ、最初はこれを聞いとく

かな。

「この住所は？」

「って、いきなりそれかよ。あゝ、確か相模国の……」

え？ 相模国って昔の神奈川県の名だったけ？ 神奈川県に「相模原」っていう所が今でもあるのは知っているけど「相模原」って今は無いんじゃないかな。え、っていうか昔？ でも、あれ？ また混乱してきた。どういう事なんだろう。

「あの……」

「んー……悪い、何でも聞けつつアレだが忘れたもんはしょうがねえ。アルツハイマーかもしれないよ」

おいおい。ていうか、え？ もう訳が分からない。ここは私の知らない場所なの？ ていうか、何で私は相模国にいるんだろう。これは夢？ 夢だと思いたい私は頬が赤くなるまで思いつきりつねった痛い。これは夢じゃないの？ でもだとしたら何なのだろう。そうだ。まず外を確認しよう。この人の家は別に普通にソファや台所にテレビなどある普通な家って感じだけど、外はどうなんだろう。

「えっと……外を確認してもいいですか？」

「ん、ああ」

階段降りて、私は急いで玄関を出た。引き戸が勢いよく開く音と同時に私は異様な光景に目が丸くなる。高層ビルがたくさんあり、何か自転車みたいなので空飛んでる人たちがたくさんいる。何となく未来にきた感じはするけど、着物を着ている人や所々昔風な建物も混ざっている。そして私のような制服ごく稀にいたり、現代の服を着ている人もたまにいたりするくらい。何か現代と昔を混ぜたみたいなの所だな。……質問を変えようか。今の西暦は何年ですか、と颯馬という名の男がいる部屋にひたひたと歩きながら戻り、質問をしようと思った。何かここは一次元でも、二次元でも、三次元でもない気がする。もしかして……ってなワケないよね。私最近漫画読みすぎかも。落ちつくんだ私。私が落ち着かないで誰が落ち着くんだ私。って私しかないよ。とりあえず今一番聞きたいことを質問

として、私の納得のいく答えをもらおう。

「もう一つ聞いてもいいですか？ 今は西暦何年です？」

「おまつ、頭大丈夫か？ …… お前こそアルツハイマーじゃねえか」
ぐっ……むかつくけど否定出来ないのがすごい悔しい。確かにそう
言われてもおかしくない質問。だけど今はそんな答えなんて期待し
てない。今は2009年だと言つて。そうしないと私は本当に混乱
してしまう。驚きすぎて気絶しちゃうかも。私は混乱寸前だった為
にすごい形相でこの人の顔を見た。

「冗談だつて。西暦は……」

2009年だよ。そう言わないと私困るから色々。変な期待を
胸に言い放たれた言葉は私にとつてとても残酷なものだった。

「3001年だった気がする」

……えええええええ。ここは昔じゃなくて未来いい？ ええええ
えええ。でも未来でも過去でもないと思う気がするのは私の気のせ
いかな。その根拠は何なのかと問われれば、答える事は出来ないけ
れど私の五感がそう知らせている気がする。やっぱりここはアレな
の？ あの漫画でよく出るアレなの？ いや、まさか。そんなワケ
あるかい。あつたら、お前アレだぞ。あえて言うのは避けていたけ
れどまさかやっぱりここは「パラレルワールド」なのか？ 別名は
「異次元」や「四次元」といわれちゃうアレ？ タイムスリップな
らまだ少しの理解力を活発させる事は出来るけど、別にタイムスリ
ップしたわけでもない。私が元いた世界にはない世界。簡単に言え
ばアベコベな世界つてことだね。こんな非現実的な事があつても
いいの？ さすがに気絶するほどは驚かないけれど、これはやばい
だつて住む場所とか食べる物とかどうするの。今のところ頼れそう
なのはこの頼りない男だけなんだよ。本格的にどうしよう。落ちて着
けと言われても落ちて着けないよ私。もう笑うしかないよ。

「そ、そうなんだ……あはは……」

「おい、大丈夫か？ 顔色悪いんじゃないか？」

この状況で顔色が良いわけない。気分的な問題だけれども、気持ち

悪いかも。まずこの人に何て言えばいいんだろ。「家がありませんって？ それは唐突すぎる。でもそれしか言いようがない。せめて今日だけでも泊めてくれないだろうか。とりあえず恥も承知で言ってみますか。多分「ふざけんよ」とか言って笑い飛ばされるかもしれない。いや、もう駄目もとでいい。

「なんか……家がなくなっちゃった……みたいです」

「ああ？ そうだな……じゃあ、ウチに住めばいいんじゃないかね？」
「ほら、やっぱり笑い飛ばされ……って「住めば」って言った？ 今住めばって言ったのこの人。てつきり笑い飛ばされると思ったのに。いくら馴れ馴れしいとはいえ、初対面だし否定される可能性はいくらでもあった。むしろ否定されるんじゃないかと思ってたのに。この人は何も追及せずただ優しく微笑んでいる。

「い、いいんですか？ あの、家賃とか食べ物とか……その他いろいろ……」

「ああ。そのかわり店の手伝いしてもらうからな」

わりと簡単に答えを出してしまったみたいだけど本当にいいの？

言った本人が言うのもおかしいけれど、ノリが軽くないか。もう少し真剣に考えてもいいじゃないのかな、と思いつながら安心してしまつ自分がどこかにいた。もし断られたら、行く宛てが全く無かつたから。せめてこの人が営業しているお店で働いて、恩返しをしなくちゃ。

「どついうお店なんですか？」

「『何でも売ります、買い取ります』がキャッチコピーの極普通の店屋。一階でちよつとちらつと見たろ？」

そういえば何か品物が置いてある棚とかレジみたいなのがあったよ。うな気がしなくもない。あの時はそういうの見る余裕なんてなかったから。すごく焦っていたから。階段おりる時も二段飛ばしで行つてたぐらいい焦っていたのよね。

「え？ じゃあ本当にいいんです……か？」

「てめえもしつこい奴だな。それとも俺と住むのがそんなに嬉しい

のか……?」

「い、いや、違います!」

えっと……とりあえずこれは一件落着しちゃったのか。もうよく分らない。どうにでもなれ。絶望かと思っただら希望で、終わりかと思っただら始まりだった。でも一つだけ分かることはこの神埼颯馬と
いうこの男の家に居候するのだけは確かなことだった。

第一章？【すべては必然的】（後書き）

何ていうか、ここまで読んでくれて本当に嬉しいです。

こんな長々しく読むのが面倒な文章を、読んでくれて感謝です（泣

第一章？【すべては必然的】（前書き）

これで、一章が終わります。ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

暇な時にでも、読んでいただければ嬉しいです。

第一章？ 【すべては必然的】

そしてこの後私は「本当にいいんですか？」と何回も何回も聞いて、しつこいくらい聞いた。でもそれでも「いいんだよ！！ しつこいよ！」と逆ギレされてしまった。そこまで言うなら私はお言葉に甘えて居候という名の住居をさせてもらおうと思った。助かった。でも正直、まだこの颯馬さんという人は信用は出来ない。初めて会った人にいきなり信用しろ、と言われても無理な話である。だけどきつと何とかなるし、大丈夫だと思う。この人の笑顔は憎しみとか妬みとか、人間なら誰しも持っている汚くて醜い感情を一瞬だけでも忘れさせてくれる気がした。昔の私なら、信じるなんて言葉は「偽り」の一言で片付けてしまってただろう。でもそう思いたくないのは少しだけ、ほんの少しだけこの人を信じてみたいと思ったから。そんなこんなの流れで、居候させてもらう話をした後、いきなり今から私は颯馬さんのお店の手伝いをする事になった。といつてもあまりお客さん来ないんだそう。これじゃ儲からないんじゃないのかな。でもそんな事言ったら少し失礼か。混乱していて細かい疑問とかが頭の中でよみがえってくる。今日って何月何日なんだろう。この長袖のブレザー制服だと少し暑い気がしないでもない。私が出た世界と同じなのかな？ 一応、何月何日かぐらいは聞いとこうかな。

そう思ってレジを机代わりに右手で頼杖ついているこの滅茶苦茶そうな男、神崎颯馬に質問してみた。

「今日は何月何日ですか？」

「やっばお前……アルツハイマーだろ」

こいつ、一発殴っていいのかな。だって仕方ないじゃん。あんたは事情知らないからそうお気楽な事言えるかもしれないけど、こっち

だって悩んでいるんだかね。ここから出て行く事とか、どうやって帰ればいいのかとか。だけどあえてここは我慢しとく。殴って追い出されたら行く宛てがないし。

「違います。で、何月何日ですか？」

「五月三十日」

五月三十日か……。私がいた元の世界でもそのくらいだった。という事は時間の流れは私のいた世界と同じって事だろう。それだけでも救いかもしれない。何か共通点があるという事はいつか帰れるかもしれないと、わずかながら希望と期待がふくらむ。

「丁寧にどうも」

というか混乱していて、真剣には考えていなかったけど、私はいつまでここにいなければならないんだろう。さすがに死ぬまでこっちにいる訳にもいかない。でも帰り方が分からない。別にホームシックじゃないんだけどさ。何でもかんでもこの颯馬さんをあてにしないと駄目なんだろうな。この人が言っていることは、若干当てにならないかもしれない。でも実は正直なところ、しばらくここでの生活してみたいと思っている。私が元いた世界はともつまらなかつたから。色で例えたら灰色。真っ黒というわけでもない。絶望でもなければ希望でもない。そんな中途半端な世界。ここにいればはつきりするかもしれないから。だから馴染んでいきたい。

そうやっていろいろと考えながら、御店の床をモップで拭いていると、レジのほうから颯馬さんの声が聞こえてきた。

「あー、楓。あっちの倉庫からアレとってきてくれ」

「はい。ってアレじゃ分からないです」

ちゃんと場所指定ぐらいはちゃんとしようよ。本当に面倒くさそうにするな。やる気なさそうだし。本当に滅茶苦茶な人。よくお店をやるうって決心したよね。結構こじんまりした店だし、大きい店じゃないから楽なのかな？ いや、仕事に楽なんてものはないか。しかもそんなに客は来ないって自分で言ってたし。

「えー、赤い文字で書いてあるダンボール箱。確か赤い文字で書いて

てあるのはひとつしかねえと思うから」

「分かりました」

言われた通り、颯馬さんに指差された扉をあけてみる。そして驚いた。この家にこんな広い倉庫があるなんて知らなかった。何か、お店の中と同じぐらいの広さじゃないのかなこれ。まあ、どうでもいいけど。私は赤い文字で『電化製品』と書いてある大きな箱を抱えて、あの偉そうに座っている男のいるレジの前に持ってきた。

「お、ご苦労さん。おっ、そうだ、明日非番だからお前の着物買いにいくか？」

「え？」

そういえばこんなブレザー制服着ている人なんて、こっちの世界にはいない事もないけれど、そんなにいない気がする。皆基本、私服が着物っぽかった。というか私ずつとこの制服着てたんだよね。汗でベトベトだし、新しい服着たいかも。颯馬さんだつて着物着てるし。でも颯馬さんの着ている紺色の着物は悔しいことに持ち主と合っている。黒髪と紺色で印象は暗めだけど大人っぽく見える。ていうか今頃だけど、颯馬さんって結構男前な顔立ちしてると思う。ただひげとか剃ればもつとカッコいいと思う。ひげがあるせいで、少し老けてみえる。二十代前半ぐらいの年齢だと思うのに、二十代後半か三十代に見える。後ちょっと無造作にしている黒髪を整えてくれればな。ってこの人よりも私だ。何長々とこの人について語ってたんだ。自分で気色悪いと思ってしまった。そして私、お金がないんだけどどうしよう。

「俺が特別に買ってやるよ。俺からのプレゼントなんて滅多にねえからな」

「い、いいですよ。そんな居候している身なんだし、あの……でも……」

さすがにそれは悪い。というかこの人は随分と気前がいいな。でもさすがにそれは居候している身としては申し訳ないと思いつつも、欲しいと思っている自分がいやらしい。

「いや、正直な話さ、俺がお前の着物姿見てえし、絶対に赤とか桜色とか鮮やかな色似合うんじゃないか？」

いや、似合うんじゃないかねえかと聞かれても分からないから。変態親父から、キモイ親父に格上げするよ。いや、二十代っぽいからキモイお兄さんか。ってどうでもいいわそんな事。

「そ、そうですか……」

私はわざとこの変態から目をそらす。やっぱりこの人の家に居候するのは考え直したほうがいいかもしれない。いや、でも今のところはこの人しか頼れないし。何か別の意味で憂鬱だ。理由と目的はどうあれ、買ってくれるのには変わらない。そうだ。ポジティブに考えよう。

「っと、そろそろか。この『営業中』の看板を表に出してこい」

「あ、はい」

『営業中』と筆文字で書かれた看板を抱えて、引き戸の近くに置いた。だらしなさそうにしているけど、営業時間はちゃんと守るんだね。って当たり前でしょ。私一体どんな目でこの人見てるんだ。お金も何も払えないし何もしてあげられないけど、働いてその分頑張ろう。着物も買ってくれるみたいだし、食べる物も何とかしてくれるみたいだし。

んー、なんとというか働くだけじゃすごく申し訳ないかも。何か私にでも他に出来ることないのかな。

「今日はいつもより客来ないかもしれないねえ……」

「え？ 何ですか？」

やっぱりこの店屋は儲からないのかな。だったら私どこか自分も養えないんじゃないの。颯馬さんはレジから立ち上がり、そんな考えを砕くように私の前に現れて頭を撫でてくれた。

「今日この近くにお祭りがあんだ、客はそっこのほうに行くだろうよ。でも安心しろ。俺の飯は用意出来なくても、お前の飯はちゃんと用意してやるからさ」

「……ぶっ、あははは。そんな大げさな事言わないでくださいよー」

真顔で何格好つけて言っただか。思わず噴出しちゃったよ。この人優しいんだか、真剣なんだか、変態なんだかよく分かんない。だけど退屈しない。飽きない。笑顔の仮面なんかつけなくても、私はちゃんと笑える。この人の前だと素で笑える。何だろう。不思議な気分。

「やつとちゃんと笑ったな」

「え？」

あれ？ 笑ったのは多分これが初めてじゃないと思う。確かに声だして笑うのは初めてかもしれないけど。でも「ちゃんと笑った」ってどういう意味だろう。

「いや、お前がちゃんと笑うのって初めて見たし。なんつーか、こんな顔も出来んだなって」

「私だつて人なんですよ？ こんな顔も出来ますよ、あなたみたいな無愛想な人は違いますよー」

そんな刺々しい言動とは裏腹に私にとって初めて言われた言葉だった。漫画だとかクサイ台詞だなって思うけれど、何かリアルに言われると恥ずかしいし照れる。でも嬉しい。私を私だと見てくれる人なんていなかったから、すごく嬉しい。こんな事思っなんて変なのかな。でも嬉しいものは嬉しいんだよ。

「まあ、そうだな。悪いな、変なこと言っただけ」

「そんなことないですよ。嬉しかった気もするし」

「へえーそっかあー？」

あまり何も考えずに少しさらっと素直に言ったら、颯馬さんはニヤニヤと笑ってきた。だからその笑い方やめてって。さっき言ったことと前言撤回するよ。そんなやり取りしていると、引き戸が開く音が御店内に響く。お、お客さんが来た！？ 七十代くらいのおじいちゃんだ。ていうか、ちゃんと客来たよ。

「いらっしやいませー、何かお探して？」

颯馬さんにはつこりと今までに見たことのない満面の笑みを浮かべ

ていた。気色悪。それって世間でいう『営業スマイル』ってやつですか。さすがにさつきみたいにダラッとやる気なさそうにしてらんないか。って私は何すればいいんだよ。こんな所で突っ立ってても仕方ないのに。私があたふたと慌てていると、その七十代のおじいさんが口を開く。

「息子が虫をたくさん取るんだーってうるさくてね。虫かごと虫取り網はあるかい？」

「はい、ありますよ。楓、一番右の棚に虫かごあるからとって」

颯馬さんは虫かごが置いてあるという右の棚を指差した。竹で出来ている虫かごだった。すごい。初めて見たかも。ていつか結構何でもあるね。あ、だから何でも売りますってキャッチコピーなのか。今さら納得だ。私は竹で作ってある虫かごは抱えながら、颯馬さんに手渡した。

「はい」

「ああ、サンキュ。えと、虫取り網は……これだな」
レジの横にある棚にもたれ掛かっている虫取り網をとり、すばやくレジ打ちをする。私

コンビニとかやスーパーのレジ打ちとかすごい憧れるんだよね。なんかっこいいし。

「2100円です」

「はいよ、じゃあ三千円で」

おじいちゃんは颯馬さんに三千円札を手渡した。三千円札なんて初めて知ったんだけど。二千円札なら昔あったのは知っているけど、三千円札なんて昔も今もないよ。なんか、やっぱりこの世界にいと自分のいた世界じゃないっていうのがひしひしと感じてしまう。
「900円のお返しです。ありがとうございます」

「ところでそこのお嬢さんはもしかしなくても御前さんのコレかい？」

右手の小指をたてながら、そう言って笑うおじいちゃん。小指をたてるって事は「恋人」？ え、いや違いますから。この人と私はそ

ういう関係じゃないから。ほら、颯馬さんも否定してよ。

「んー、まあ、そんな感じですよ」

えええええ。そんな感じってどんな感じいい？ ちょっと待てよ。

何嘘ついちゃってんの。あ、おじいちゃん帰っちゃう。この人に嘘つかれたまま帰っちゃうよ。さっきの事、『違いますから』って言ったほうが良くない？ でも今更って感じだよ。

「そうか、仲良くやりなされ。そんな風にしていられるのも若いうちだけだぞ」

わざとらしく笑いながら、おじいさんは御店から出て行く。とんでもない誤解を背負いながら。おーい、おじいちゃん、あなたすごい勘違いしていますよー。違いますよー。もしもーし。別におじいちゃんが悪くないから、まずはこの人に文句を言うべきだろうか。

「な、何言ってるんですか全く」

「まあ、いいじゃねえか、嘘も方便って言うしよ。……嘘じゃないほうが良かったか？」

初めて人を軽く殴った。いや、恥ずかしさよりも怒りが勝った。こいつのひん曲がった根性叩きなおしてやろうか。つーか、性格はひとつにまとめるよ。茶化したり、真面目だったり、これ私以外の人だったらもうすでに怒ってるよ。多分、私じゃなかったらもうすでにもっと別の居候先を見つけてると思うから。

「つてえ……！」

「ふざけないでください」

「人を殴つといて随分な物言いだな、楓？」

前途多難かもしれない。この男のペースには手こずってしまう。よく分からない人。でも思わず笑っちゃう。よく考えれば人にこんな怒ったり、話したりするのは久しぶりかもしれない。

こんなはちゃめちゃコメディみたいな出来事はあつという間に終わり、空も大分暗くなってきた。一日ってこんなに早かったかな。一日でこんなに笑えた日なんてあつたかな。考えて思い出してもそ

んな日は私にはなかった。だから颯馬さんとふざけ合うのも悪くないと思つた。そのおかげで私は今ちゃんと笑うことが出来る。わざと笑わなくても自然と笑うことが出来る。ちなみに今日来たお客様の数は十人ぐらいだった。確かに客は少ない。だけどその客がない時間は、いろいろ他愛もない会話で盛り上がっていた。

この町にはどんなものがあるとか、何でお店屋をやるうと思つたのかとか、そんな話で盛り上がった。何というか、颯馬さんがすごく楽しいそうに語る。お店屋を建てたのは何か儲かりそうだからという単純な理由らしい。でも実際はそんなに儲かってないじゃないの？ とか思つたりしてみたり。だから少しはしゃぎ過ぎて疲れたかもしれない。体は丈夫なんだけど、体力とか皆無に等しいから。

その疲れをお風呂のお湯で回復させる。私の家のお風呂より狭いけど、この方が落ち着くかも。そしてご飯もちゃんと用意してくれただ。お米にお味噌汁と焼き魚に漬物と、世間的にこれは質素だと言うのかもしれないけどあつたかい。しかも味付けに工夫されておいしい。それはそれでとても悔しいけれど。しかも寝る時に着るジヤージまで貸してくれた。颯馬さんのだから大きくてぶかぶかなんだけど。でもちゃんと私が住みやすいように気を使ってくれる事が嬉しい反面、とても申し訳ない気持ちでいっぱいだった。そのかわりにお店で働くといつても、それだけではまだまだ足りない。他にお仕事探そうかな。バイトでもいいから。というかバイトつてこの世界にあるの？

ソファに座つて色々考え事してただけなのにまぶたが重くなつてきた。今は夜の9時だけどこんな早くに眠いと思つたことは一度もない。むしろ私は夜行性だから。なのに眠い。これはちゃんと働いた証拠だよ。うん。一人で勝手に納得していると、いつの間にか颯馬さんが私の後ろにいた。

「明日は俺、非番だから絶対着物買いに行くからな」

何かその言葉かなり聞き飽きた。それ朝も言つたよね。また買いに行く宣言を今になって言い出されても頷くことしかできないわ。私

は別にどちらでもいいのに、何でこの人はそこまでこだわるんだろう。でも着物を買に行くという事は、外にでるって意味だよな。この町のことはよく知らないし、少し知つとかないと後先困る。お言葉に甘えさせてもらおうかな。一番安いものでいいし。

とにかく今日は寝たいんだけど、結構重要なことを思い出した。そして御店の手伝いの時、何気にさらつと言われたことだった。そして、それはとても最悪な事でもある。いや、最悪って言ったら颯馬さんが可哀そうか。

『布団ひとつしかねえから』

貧乏な生活だろうしね。一人暮らしっぱいから、二人分の布団なんて用意してるわけない。だから私はソファで寝ると遠慮してるのにも関わらず、

『風邪ひいたらどうすんだ。俺の布団使えよ、俺がソファに寝るか』
『ら』

だけどそれは申し訳ないと思ったので、首を横に振って私がソファで寝ると言ったら、『なら、一緒に寝るか』

……どうしたらそういう流れになるのよ。もつと他にいろんな方法があるだろうよ。ていうか絶対に寝れないから。眠いのには寝れないって一体どこの拷問なのよ。ちゃんと居候先は確認しとくべきだった。

「さてと、今日は慣れない仕事で疲れただろ？」

「う、うん……」

だから無理ですって。戸惑っている私にお構いなく、颯馬さんはお布団の中にぬくぬくと入ってしまった。ちよ、待てよ。それはないよ。颯馬さんが寝たらソファに移動しようか。

「早くはいれよ」

とりあえず布団の中に入ろう。もしかしたら寝れるかもしれない。

颯馬さんの横で小さくうずくまりながら私はお布団の中に潜り込む。颯馬さんとは反対方向を見ながら寝ることにした。そもそも一人用のお布団に二人で寝るっていうのは少し無理があるよね。

どうしても体が密着するし。あ、でもあったかい。なんかこのまま眠れちゃいそうな気がする。とかいっその事、早く寝かせてください。動揺隠すように体を動かさないようにする。そしたらいつの間にか隣から、うるさいいびきの音が聞こえた。寝るの早っ。私がかだけだけ緊張してるのか、知らないのか。早く寝なくてはいけないのにこんな状態で眠れるわけない。何でこんな事になってしまったのだろう。階段から落ちて始まる物語だなんて、ロマンの欠片もない。だけど結局は始まってしまった。偶然なのか必然なのかは分からない。だけどきつと必然なんだと思う。だってもうすでに起こっている出来事だから。そしてこの家にきて初めての夜は過ぎていった。それと同時にこれからの居候の日々が始まった。

第一章？【すべては必然的】（後書き）

段落少なくて、申し訳ないです。今度手直しします。

第二章？【喜びと思い出】（前書き）

…連続投稿すいません。ちょっと雑ですが、読めない事もないので大丈夫だと思います。

第二章？ 【喜びと思い出】

朝日が目の奥まで浸透してきた。目をつぶっているのにまぶしい。けれどもも学校に遅刻してしまう。睡魔と理性との戦いが頭の中で必死に繰り広げられる。太陽が暖かくて布団がポカポカしている。睡魔の勝利だ。私は二度寝をしようと思った。いつも七時にセットしている目覚まし時計が鳴ったら起きよう。だがそんな考えを打ち砕くように、昨日の記憶がフラッシュバックのように脳裏に映像が飛び込んでくる。

「あ」

私は昨日の記憶を思い出すと共に、上半身だけを起き上げようと思った。だが何か強い力で腰が押さえつけられていて起き上がる事は不可能だった。押さえつけられているというより腰の後ろに手が回されていて、またもや抱きしめられている様に思う。そして腰に回されている手の正体は現在私がこの家に居候させてもらっているその家主でもある。かつ滅茶苦茶な男、神崎颯馬さんとはこの人の事を言う。

腰にこの人の手がある為に私は動けなかった。これではまるで抱きしめられている感じになつてるじゃない。私はこれでも女なんだよ。というかこの人はどうやら私を抱き枕にして寝る習性があるみたいだ。まだ会ったばかりなのに、一体どういう事なのかと問われれば私だってそれは知りたい。とりあえず今すぐこの腰にある手を離してくれさえすれば、私は何も言わないし、何も文句は言わない。まず少し起こしてみる事にした。

「もしもーし？ 起きてくださーい」

颯馬さんの頬を軽くペチペチと叩く。駄目だ起きない。軽く叩いただけでは起きないのは最初から分かっていたけどさ。でも少なから

ず起きてくれるという可愛い期待に答えてくれてもいいじゃん。こ
う見えても私の心って繊細だからね。薄いガラス一枚みたいになすぐ
粉々に割れちゃうから。少し半泣きになってるのにも関わらず、そ
んな事もお構いなしにいびきかいて寝ている颯馬さんを見てみると
少しずつ確実に苛立ちが募ってきてた。いつの間にか颯馬さんの頬
を叩く加減を強くしていた。この人にはこれぐらいが丁度いいと思
う。

「起きてください！」

起きないのの良い事に無言でずっと叩き続けていたら、颯馬さんの
頬が真っ赤に腫れていた。これはやばい。ていつか見ているだけで
痛そうなのに、何で起きないのよ。これ本当は起きているんじゃない
の。でも起きているならこの叩かれている痛みに耐えるメリット
がない。もし起きていたらという事を予想しながら、颯馬さんがマ
ゾという疑惑が浮き上がる。

「起きてー！」

力加減を全くせず叩き続ける。さすがにこれはもうやめた方がい
いか。もうこの人が起きるまで待つてないと駄目なんだろうか。て
いつかこの人ただけ寝起き遅いんだよ。私でも目覚まし時計無し
でも普段の生活が七時起きだから、もう体に染み付いている。目覚
まし時計がなくても、普通に起きられる。

「ぐ……」

かすかに呻き声をもらし、眉が若干引きつっている気がする。まる
で叩かないでくれと願っている様にも見えた。これは起きているの
か、起きていないのか、はっきりしてもらいたんだけど。しかも
颯馬の口元には大量のよだれ。ちよつと良い大人のくせしてよだれ
垂らしてないですよ。ていつかそれ以上近づくと、私の髪にヨダレつ
くんだけど。あ、ついた。洗わなきゃ駄目じゃん。

「はあ……」

わざとらしく溜め息がでる。疲労や憂鬱とか言うより呆れている。
今の溜め息にはこの人をどうにかしてくれ、という意味でもある。

お願いだから起きて欲しい。いや、この腰の上にある手を離してくれればそれだけでいい。後はもう二度寝でも三度寝でも何でもしていいから。お願いだから私を巻き込まないで。別に体が密着して少女漫画みたいに、心臓が破裂しそうとかそんな乙女な思考回路はしてないけれども。ただこういうのはあまり良くないと思うわけで、決して緊張しているわけではなくて、そういうわけではない。って私は一体誰に言い訳してるんだろう。混乱しながらも色々この場から脱出する計画を考えていると、

「くっ……はは……」

笑い声が聞こえた。この家には私と颯馬さんしかいないと思う。しかもこの笑い声、すごく近くから耳に響くんですけど。少し笑い声を堪えているようにも見える。ていうかもう顔が笑ってんじゃん。そう、これは言わずとも分かる。この憎たらしい笑い声の主は神崎颯馬だった。

「お、起きてたんですか……?」

「お前の反応面白かったからな。顔色がコロコロ変わってよ」
憎らしいくらいの笑みを浮かべる。まるで罨をしかけて成功した時のような悪戯好きの子供のような笑顔だった。怒りたかつただけ、何かここまで来ると呆れてしまう。

「いつから起きてました?」

颯馬さんは自ら頬に軽く触れて、

「ここ叩いているところから……って、いてっ。地味に痛え」

と本当に痛そうにしていた。かすかに目に涙が溜まっている。そんなに痛かったのか。何か悪い事してしまったかもしれない。でも地道な作業こそが明日に繋がるから。これも自業自得だと思ってくれとありがたい。だって起きているのに起きないこの人が悪い。私は自分の考えを肯定する。開き直りながらも一体、どういう理由で起きなかった理由を追求する。もしかして私をからかっていたのかな? ここは一つ、私も颯馬さんの事からかってあげるようかな。自分でも分かるくらい「ニヤリ」という効果音がまさに似合う顔を

してみる。

「目から涙がでてますよ」

「違えよ、これは汗だろ汗」

目から出る汗ってどんな汗？ もし目から汗が出ていたとしても、人はそれを涙と呼ぶ。それを認めないのは負けず嫌いなよね。でも正直、この人が慌てる姿を見るのは新鮮だった。何か面白いんだけど。この人の反応の方が面白いんだけど。

「嘘ですよ」

「うるせえな！ 本人が汗だって言ってるんだから汗だろ」

いつの間にか開き直っている。おいおい。何気に目を擦るように涙を手で拭き取っていた。認めた方が恥かかないと思うんだけど。なのに颯馬さんはわざと自ら崖に落ちるような真似をしてるよね。

「泣いた本人がそう言うなら、そういう事にしときます」

「だから泣いてねえっつーの」

最後の最後まで意地張る人だな。そうしたいならそうすればいいさ。だけど、その恥はきつと颯馬さんの背中に重く押し掛かっているだろう。というか、こんな話は別にどうでもいいのよ。何で泣いた、泣いてない話でこんなに盛り上がってるんだろう。ちょっと馬鹿みたいな気がする。

「今日は……そうだ。お前の着物買いに行くんだっけか？」

「あ、でも、そんな気を使わなくてもいいです……」

この台詞、三回ぐらい言った気がする。そして颯馬さんも同じような宣言を私と同じく三回ぐらい言ったと思う。そんなに確認しなくても私は覚えているから。でも、買ってくれるという行為自体はとても嬉しい。素直にそう言うと、颯馬さんに私をからかうネタを提示してるようなものだから言わないけど。

「だから、んな事気にすんなって」

「でも、私は気にするんです」

嬉しいのは確かにそうなんだけど、そんな本当に気を使わなくてもいい。だって、私の着物買うごときで無駄にお金を使わせたくない。

それに着物って結構いい値段するでしょ。

「ガキは素直にありがとうございますって言ってるやいいんだよ」
颯馬さんの物言いに頭に少し血が上りかける。こう見えても十七歳で立派な大人だと思う。確かに背も高くない。そして普通の人より大きすぎる瞳がより幼さをひきだしている。少しムキになって言い返してみる。

「ガキじゃありません」

「ガキじゃねえって言ってるうちはガキだ」

「だって本当にガキじゃないですもん」

「何だお前、大人として扱って欲しいのか？ だったら……」

別にそういう意味でもない。大人として扱って欲しいんじゃない、子供扱いしてほしくないだけ。一つ疑問に浮かんだのは私の事を子供だと思っているなら、そういうセクハラな発言は控えていただけるとありがたい。顔にはださないけど、本当心臓に悪いって。

「と、とりあえず顔洗ってくるんで、この腰に回されている手を離してください」

自分で言っという何だけど、この状況を忘れるところだった。颯馬さんは起きたのだけど、実はまだ私の腰には手があって、まだ抱きしめられている感じだったのだ。くだらない会話していたら、すっかり言い忘れていた。

「まったく、仕方ねえな」

颯馬さんは名残惜しそうに手を離れた。助かった。私は立ち上がると、さつさと急いで洗面所に向かう。実はさつき颯馬さんのよだれが髪の毛についてしまったのである。朝からシャワーあびるのは正直面倒なので水道の蛇口で我慢する。

「逃げるとはいい度胸じゃねえか」

「別に逃げてないです！ 誰かさんのよだれが髪の毛についたんで洗ってるだけですから」

少し嫌味っぽく言ってみる。だけど、そんな嫌味も通用しなかったみたい。

「だれかさんって自分の事か？」

「自分の事は誰かさんって呼びません！ あなたの事です」

「あ、ああ、悪い。寝てて気付かなかった」

「いや、起きてたんじゃないですか？」

普段はこんな騒がしい朝を体験する事はない。しかも私はいつもこんなツッコミキャラとかじゃない。いつもの私は、冷徹で冷酷で物事はすべて客観的にとらえる冷静な人間を装っている。学校では孤立したり、皆に嫌われたりするのがいやだから、明るく振舞うようにはしているけど、本当の私はもっとひどい奴。人が苦しむのを見ていても何とも思わない。そりゃあ、それなりに怪我した人がいたら「大丈夫？」とか言って、気にしたりはするけれどそれは果たして本当に心配しているのかは分からない。私は自分自身というものが分からない。自分がどんな性格で、何が好きかっていうのも曖昧で、ただ何となく生きているだけ。というより大体の人がそうだと思う。何となく夢を見つけてそれに向かって目標をたてて頑張る。そしてその目標が達成出来ればまた新しい目標に向かう。それは誰に指図されているわけではない。自分で何となく思っているからそういう行動をとる。でもその「何となく」は重要な意味をもつ。だけど私の場合、「何となく思う」っていうことさえ自覚出来ない。何となく思っただけでもそれに気付かない。自分の気持ちは自分が一番分かっているはずなのに、自分で自分の考えている事が分からない。他人の雰囲気や意見に流されて、自分というものなんて昔から分からないし、知る由もなかった。要するに私は自分を知るのが怖いんだ。私は臆病なんだ。もし自分の意見がはっきりして、その意見を他人に言ってみて変と思われたらとか、否定されてしまったらとかいう考えが頭に染み付いている。だから自分から行動するということは今まで一度もなかった。誰かに言われたから行動している。

だから、こんなに人に言葉を吐くのは初めてかも。だって私は誰かに話しかけられていても心の中ではくだらないとかつまらないとか

冷めた事を思っているだけ。だから本当に思っている気持ちや言葉は、他人の前で口に出したことはそんなにない。だから正直、驚いている。些細なツツコミや怒号だけど、それでも思った事を口にすることは出来ている。これは喜んでいいのか、少し複雑な気分だ。

私は髪の水についたヨダレをとるついでに顔を洗う。そして颯馬さんが私専用にと用意してくれた歯ブラシを手取る。何か何故か分からないけれど、この家には歯ブラシが十本くらい装備されているらしい。誰かお客さんが泊まった時にとでも思ってたのだが、一度もそんな経験はなかったらしい。だからこのお客様用の歯ブラシを使うのは私が初めてだった。そもそもこんな店に誰も泊まるうという人はいないだろう。いや、ここにいるか。でもこれは仕方ない。どこにも行く宛てがないから。

「いつまで顔洗ってんだんだよ。メシ作るぞー」

「待つてくださーい……今歯磨いてますからあ……」

私は急いでコップで口に水を含む。喉をゴロゴロと鳴らして、水を吐き出す。口に付着した水を洗面所の近くにかけてあるタオルで拭き、颯馬さんの声が聞こえる台所に走って向かう。そしてふと一ツ疑問に思う事があった。

「ていうか、私もご飯作るんですか？」

「ああ？ 当たり前だろうが！ てめえ、この家にタダで住もうと思ってたのか？」

「いや、それは……」

私もこんな衣食住を提供してもらって何もしないというのは自分自身が許せなかったから、何かしようと昨日の夜中にずっと考えていたところでもあったけど、だからこそこんな形で何か出来る事あるなんて正直驚いた。役に立たないかもしれない。でもそれが私に出来る精一杯の事で、借りを返せるなら料理に挑戦してみても悪くないかな、なんて考えながらも気がかりになる事があった。実は私、料理とか出来ないんだよね。皆にそう言ったらかなり意外って言われたんだけど、私ってそんなに家庭的な子に見えるのかな。それは

それで悪い気はしないけどね。

「じゃ、簡単なところおにぎりでも作るか」

冷蔵庫についているフックにかけてあったヒラヒラのフリル付きの白エプロンをつけて、さらっと言い流す。あえて突っ込まなかったけど何で男がヒラヒラのフリル付きのエプロンつけてんの。男がそういうエプロンつけるのはかなり気持ち悪いよ。私が着ても若干抵抗があるのに。もう少し別のもっといいエプロンとかあるだろうに。もしかしてそのエプロンって颯馬さんの趣味なのかな。だったらかなり悪趣味じゃないか。いやでも、デザイン自体は悪趣味じゃないんだけど、ただ着る人と合っていないだけ。

颯馬さんのヒラヒラのフリル付きのエプロン姿を眺めて絶句してしまふ。そんな私を気にもとめずに、冷蔵庫の中にあると思われる食材を片っ端から出していた。だけど私の目が悪くなければダイニングテーブルの上にあるのは梅と海苔しかないよね。まさかとは思うけど、これだけしかないなんて言わないわよね？ 冷蔵庫にこれだけの食材しかないなんて言わないでね。本当そういうの悲しすぎて涙出るから。

「梅と海苔しかねえ」

やっぱりいいい！？ 何というか、颯馬さんにかける言葉も勇気も無い。こういう場合って何て言っておけばいいのかな。何を言っておけばその人を傷つけずに済むのかな。もう普通に無視しておにぎりを握ってもいいよね？ もしかしたら今日はたまたま食材が無い日なのかもしれない。そうだ。そうじゃなかったら、どうするのよ自分。自分で勝手に一人で納得することにしよう。

「じゃ、作りましょうか」

私の呼びかけと同時に、颯馬さんは素早く塩水を手につけて炊飯器からお米をすくい上げる。颯馬さんは慣れた手つきでお米を丸めていく。丸めたお米の中心に穴を開け、梅をいれてのりで包んでいった。ていうか切り替え早い上に手先が器用だ。私が手掛けたらきつと歪なブラックホールとか出来ちゃいそう。本当、何で神様は人に

器用な人と不器用な人にわけたんだろう。皆同じでいいじゃないのよ。ってそれはそれで怖いけれども。

これ私がおにぎりを手掛けなくても颯馬さん一人で終わっちゃうんじゃないかな、と勝手に予測しながら颯馬さんの握り飯を作っている後ろ姿を呆然と眺めていた。そんな甘ったるい事を企んでいたら颯馬さんの方からわたしの方へと振り返り睨んできた。

「何そこで突っ立ってんだ？　もしかしておにぎり作れないのか？　うわ、凶星つかれた。どうしよう、何て言い訳しようかな。って言い訳するのは美しくないわね。ここは正直にそう言うべきかもしれない。でも、それは自分のプライドが許さない。抵抗するだけしてみよう。」

「そ、そそ、そんなわ、そんなわけないじゃないですか！　ア、アハハ……」

「噛むほど動揺してんじゃねえか」

「……」
私って演劇とかに向かないかも。明らかに噛み噛みで動揺してるのもばれてるし。そしてまさに颯馬さんの言う通りだからこそ何も言い返せない。料理は得意どころか、苦手の部類に入る。作れるのはカップラーメンぐらいかもしれない。自炊してみようと思った事もそれなりに何度かあったのだけど、包丁で指を切り大量の血を見てかなりのトラウマになってしまったのだ。もともと血とか見るのは嫌だけど。おにぎりは包丁と関係ないじゃんと分かっているけど、自分は手先も器用じゃない。ああ、何も取り柄のない自分を私は恨むしか出来ない。けどこの壁を乗り越えないと、私はきつと役立たずと見なされ追い出されてしまうかもしれない。そう一瞬でも考えると、背筋に鳥肌がたってきた。住む場所なくなったら、私きつと生きていけない。これは超えなきゃいけない壁なんだわ。頑張らなくちゃ。でも出来ないものは出来ないから。考え方が段々矛盾してきて開き直ってしまう。

「素直に苦手なんだって言えよ。そうしたら俺が教えてやらねえ事

もないぞ」

「え？ 本当ですか？」

「鍋とか爆発したらたまつたもんじゃねえからな」

一言余計な言葉がついてくるのは聞かなかつた事にする。でもそれは良い事聞いた。颯馬さんが教えてくれればこんなに嬉しいことはない。これは願ってもいないチャンスだ。

「じゃ、よろしく願います」

「ああ、手取り足取りな」

「あ、どうも……」

ニヤニヤとからかう様に笑う颯馬さんは一言一言、本当に心臓に悪い。いつも子供じゃないとは自分で言ってるけれど、子供をからかうのはやめほしい。もしかしてそうやって余裕ぶってるのは大人の余裕ってやつなのかな。そう思うと腹立ってきた。私だって子供じゃないし、いつか仕返ししてやるわよ。

ていうかよく考えれば握り飯なんて誰が作っても同じ味だと思う。ただ塩のつけ加減とか形とかが一番重要なんだと思うけど。後はまあ、愛情ってやつかな。でも愛情を込めながらいくら握っても、形は良くなるし味も良くなる。

「せめて見栄えだけでも良くしとけ」

「はい……」

私は颯馬さんの言う通り、塩水を手につけてお米を丸めてみる。手に米がベタベタとくっついてきて、なかなか思うように丸まらない。若干、そこで苦戦しているのは情けないと思いつつ頑張ってみる。

この手についてる米が鬱陶しい。もう面倒くさい。少し諦め傾向になっていると、ここで颯馬さんという助け舟がでる。

「おまえなあ……塩水を大量に使いすぎだ。もっと少なくても……つーかもっと少なくしろ」

「あ、そっか。だから米が手にベタベタくっつくのか……」

颯馬さんって割とスパルタなのかも。結構躊躇も遠慮もせずに指摘する所はスバツと指摘していく。でもむしろその方が私には向いて

いるし覚えやすい。大体甘やかして指導するなんて具の骨頂だよ。甘やかしてたらその教えてもらっている当人は全然成長しない。だから颯馬さんのスパルタは私の理想だね。ぼんやりとおにぎりを握る事以外に精神を集中させてしまおう。颯馬さんの鋭い目がピカッと光る。

「手が止まってるぞ。ボーツとしてたら、終わるもんも終わんねえじゃねえかよ」

「わ、分かってますよ。そんな焦らなくてもいいじゃないですか」「分かってんならやれ」

正論しか言っていないから、余計反論出来ないじゃないのよ。まさに言葉に詰まるってこういう事だと思う。そこまで言うなら私だって素晴らしい握り飯を作ってお披露目してやるから。このまま黙って引き下がるわけにはいかない。私って結構負けず嫌いなのもかもしれない。

最初に手掛けたおにぎりは無残にも塩水の大量投入してしまったせいで、ベチャベチャになってしまった。この反省を生かしながらも一度おにぎりを握る事に挑戦しようと、塩水を今度は少なめにつけて炊飯器から手におさまるぐらいの量のお米をすくい上げるように取る。優しく握るけれども力強く、気合と根性をこめて握る。これは基本。外はしっかりしているけれども、中はお米本来のふわふわ感だすように丁寧に握る。握っている間は颯馬さんも何も口出しはしなかった。台所は私がお米と握る音しか聞こえなく静かな空間と化していて、正直息が詰まりそう。

そしてようやく小さからず大きからずといった丁度良い大きさのおにぎりが一つ出来上がった。一つしか出来なかったというのは、情けないと思う。でも自分で言うのも何だけれど、結構形も味も今までそんなに料理なんてした事ないけど、料理してきた中で一番の出来だと思う。何と言ってもやはりまずはこのスパルタ指導者の審査を聞かない事にはまだ分からない。まさに緊張の一瞬。

「ど、どうですか？」

「とりあえず形はまあまあなんじゃねえの。味はまだ分かんねえけどな」

私の手掛けた握り飯をひょいっと手にして、じろじろと眺めている。颯馬さんはニヤリと憎らしく笑いながら、おにぎりを手にして口に放り込む。よく味わうように長い時間噛んでいる。ってこれ何の料理番組？

「さっきのベタベタなおにぎりから、随分上達したじゃねえか。それとも俺の指導が良かったのか……」

悔しいけれど、確かにその通りとしか言いようが無い。塩水の加減とか握り方とか、きつちりとしつかり教えてくれたのは颯馬さんで、颯馬さんのおかげ。でも少し颯馬さんをからかってみたくて冗談を言ってみる。何でもいいから仕返ししたかったから。

「私の実力です」

「どの口がそんな事言ってるやがんだ？ ああ？」

「冗談です、颯馬さんのおかげです」

「素直でよろしい」

そう言ってる私の髪をぐしゃぐしゃかき回しながら、思わずときめいてしまうような笑顔を見せた。結局丸め込まれてしまい少し戸惑いながらも、自分の顔にある熱を冷ますのに精一杯になる。この人はどうやら頭を撫でるのが癖みたい。でも別に嫌っていうわけじゃない。むしろあったかくて心地良い。安心する。だけどうっかり心にも無いことを言ってしまう。

「こ、子供扱いはやめてって言ってるじゃないですか。会ったばかりで時間も経ってないのに、少しなれなれしい気がします」

「しばらく一緒に住む訳だから、むしろ馴染んどかなきゃあれだろうが」

確かに颯馬さんの言う事は一理あるのよね。多分、これからもつと颯馬さんの家にご厄介になってしまいかもしれない。もしかしたら死ぬまでここに暮らしているのかもしれないし、わりと早くここから出て行く事になるかもしれない。まあ、その時になってみないと

分からない事の方が多いけど。でも今はそんな難しい事はあまり深く考えたくないかも。だって今、自分でも分かるくらい退屈してない。むしろ楽しいとすら思っている。それだけで充分じゃないって考えているのは私だけなのかな。

ぼんやりと考え込んでいると、颯馬さんの顔が私の顔を覗き込むように見てくる。ていうか何かすごく顔が近いのは私の気のせいかしら？

「な、何ですか……？」

後ろに一歩ずつ後退りしながら、颯馬さんと距離を置く。焦っている私にお構いもせず、そんなに顔を近づけられても困るから。

「そろそろ着物買いに行きてえから、さっさと準備しろ」

「あ、そ、そうですね」

あ、ああ、なんだ、びっくりさせないでよ。一瞬何かと思っちゃったじゃない。自分に対して恥をかいてしまった。そういう変に思わせぶりな行動も本当にやめてほしい。

「どうした？ 顔真っ赤だぞ」

ニヤニヤと笑ってくる。まるで意地悪に成功したかのようなやりきった表情をしていた。もしかして確信犯？ 一瞬の疑問が確信に変わる。またからかわれたとしか言いようがない。やっぱりいつかぎやふんと言わせたいんだけど。

「き、着物買いに行くんですけどっけ？ なら、準備してきますね！」
声が裏返りながらも私は颯馬さんから逃げるように、台所を抜け出し洗面所に向かった。熱くなった顔の温度を冷めるべく、顔に冷水をぶっかける。付着した水をタオルで拭き取り、「はあ……」と一つ小さな溜め息をわざと吐く。こうすれば少しは冷静になって落ち着けると思ったから。

何か、さつきから本当に自分自身が保てなくなってるかも。颯馬さんのペースにまんまと巻き込まれている気がしなくもない。自分しつかりしなきゃ。気合を入れるために自ら自分の頬を両手でパチンと叩く。これは落ち込んでいる時や冷静になれない時に元気出す為

のおまじない。自分で考えたけどね。

「よし！」

「なーにがよし、だって？」

「うわあああ！」

いきなり後ろから声が降ってくる予想外の出来事に、思わず驚き奇声をあげてしまった。誰もいないと思つてちよつとした独り言を言つたので、かなり動揺してドギマギする。うわー、恥ずかしいんだけど。

「声でけえんだよ……頭に響くだろうが」

頭の後頭部を右手で押さえながら、露骨に嫌そうな顔をしている。何か二日酔いした人みたいな事言うね。声がでかいつて言われても、あんたがその私の声をでかくした元凶だから。そこ間違えないで。

「だって、いきなり後ろから……ていうか何ですか」

「俺だつて顔洗いぐらいするに決まつてんだろ」

「あ、あ、そうだ……、ご、ごめんなさい。すぐにどきますね」

先ほどまで睡眠していた寝室に戻り、ぐしゃぐしゃに乱れた布団の上に正座で座り込む。寝癖で跳ねた髪を鏡を見ないで手ぐしで直してみる。ふと自分の右手首に目が行くと、ヘアゴムが巻かれていた。何でこんな所にヘアゴムが、と謎に思ったが私の中の記憶がその答えを出す。そういえば私、元の世界にいた時は確か髪の毛を後ろに高い位置で一つ結びにしていたはずなのに、この世界に来てからなぜか髪の毛は下ろしてあつてゴムは何故か解かれていた。

律儀にちゃんと自分の手元にあるのがやっぱり謎のままなんだけど。颯馬さんが顔洗い終わったら、洗面所の鏡見ながらいつも通りにポニーテールにしようかな。といつてもいつもその髪形だから、そうしないと自分自身しっくりこないかも。それに私髪の毛が長いから下ろしているとかかなり邪魔だったりする。

颯馬さんが顔を洗い終わったのかこちらに向かつてきた。私が髪の毛をいじくっているのを見て、何してんのかと思つているように不思議そうな顔に変化する。

「何してんだ、お前」

「え？ いや、いつも結んでいるので、髪下ろしていると違和感が……」

「結んでやるのか？」

意地悪く笑う颯馬さんを無視して、鏡が存在する洗面所へと逃げる。手ぐしだからきつと髪の毛がぐちゃぐちゃに絡まるけれど、結ばないよりかはきつと大分マシだと思う。とりあえず早く結んでしまつて、着物を買いに行く準備をしよう。

髪を全体的に水で少し濡らして馴染ませ、結びやすくする。頭の後ろに高い位置まで髪の毛を一つにまとめ、ゴムで軽く巻くように結ぶ。少しボサボサな気がしなくもないけど、多分そんなに目立たないよね。

髪の毛を整え終わると、また歯磨きをする。何だかんだで歯磨きは食事する前に一回、商事後にも一回歯磨きしないと何故かすつきりしない。自分はそんなにきれいな方ではないのに、朝に歯磨き二回するのはどうしても外せない。口の中の泡をうがいできずぎ、口の中がすつきりしたところで行く準備が出来てしまった。

「颯馬さん、私は行く準備出来ました」

「俺もすぐ行くから、玄関で待つてろ」

颯馬さんの指図通りに、玄関まで足を動かす。靴を履いて、外に繋がる扉を開けてみる。やっぱり二、三回この外の異様な景色を見ても慣れることは出来ない。未来と過去が混ざり合ったような在りえない光景。高層ビルなんて元いた世界にもあるのに、このアベコベな世界で見るとまた新鮮に見える。しばらくは一人で出掛けるとかは不可能だろうな、と残念そうにしていると、後ろからかすかに足音が聞こえる。その足音は段々、確実に大きくなっていく。もちろんその足音の正体は、

「じゃ、行くか」

髭をちゃんと剃ってきた颯馬さん以外の何者でもない。現れるのと同時に私は外の世界へと足を踏み出した。

第二章？【喜びと思い出】（前書き）

ひとまずこれで最後の更新です。第二章、完結です。

第三章はまだ書き終わっていないので、更新するのは大分後だと思います。

第二章？ 【喜びと思い出】

風は生暖かく、だが少し肌寒さも残っているというまさに五月下旬といった気候だった。季節の中では夏が一番好きなのだけど、でもこういう暑からず寒からずといった中途半端だけれど清々しいこの季節もいいなって思う。道端に凛々しく立っている木を飾る鮮やかな緑色に染まっている葉も、きれいだなって思ってしまう。

道路を歩きたび見たこともない建物がとても珍しい。でもだからこそ、興味がわく。見慣れないものだからこそ新鮮なのだと思えて考え込む。自分でも信じられないくらいはしゃいでいるのが分かる。

そう、まるで子供みたいに。明らかにキャラが違っぜって思いながらも、心の中のわくわく感隠せない。

「うわあー！ あのビルすごい高いですね。あ、空飛ぶ自転車ですよ！ すごーい……」

「……そんなに珍しいか？」

「あはは……」

むしろ私の方が珍しいかのような視線に自分自身反省して自重しようと思がける。うっ、ガラにもなくはしゃぎ過ぎたわ。このアベコベな世界では空飛ぶ自転車なんて珍しくも何とも無い所かそれが普通なのかもしれない。そもそも私が住んでいた所も、結構田舎っぽいところもあったし。元いた世界の都会とかには高層ビルなんて普通にあるだろうけど、私が住んでいた地域にはそれほど大きい建物なんてなかったしな。けどものすごいド田舎ってわけでもないんだけどね。

颯馬さんが私のおのぼりさん状態を見て、溜め息をわざとらしく吐かれた。そんな露骨に迷惑そうな顔しないでよ。何か自分がおかしいみたいじゃない。確かに私はこのアベコベな世界の住人じゃない

けれども。今更ながら私、颯馬さんに時空を超えてこのアベコベな変な世界に来たって事言つてない。そもそも言ったところで信じてくれないだろうけど。むしろ信じろって方が無理だよ。私が逆の立場だったら絶対に信じないもん。まずそんな寝言みたいな事言っている人の頭を心配するかも。つてでも事実なものの事実だし。しばらくはこの在りえない非現実的な話から目を背けよう。時間が経てばこのアベコベな世界にも慣れてくるでしょう。

「あんま騒ぐなよ、うるせえから」

「す、すいません」

確かに少し……いやかなりはしゃいでしまった事にまた反省しなくてはいけない。言い訳がましいけれど、初めて見るものを見た時は誰だつて心は少年少女に帰るものだよ。さすがにさっきのは少女じゃなくて、三歳ぐらいの幼い子供に帰つてた気がするけれども。

もう本当にどつからどう見てもおのぼりさんだね。でもあちこち見渡せば見たこともない建物ばかりで飽きない。挙動不審と言われてもおかしくなくらい、目をギンギンに光らせながら目を泳がせる。そんな怪しい事を繰り返していたらいつの間にか二十分ぐらいの時間が経っていた。その二十分間の間に結構、独り言連発してたかもしれない。一応颯馬さんに話しかけているつもりだったけど、あまり関わりたくなさそうな目で見てきた為に結果的に無視されて独り言になってしまった。でもそれでも着物が売っているらしきお店には着かない様子だった。わりと遠いわね。長く歩くと私筋肉痛になるかもしれない。

気長に歩きながらキョロキョロと町並みを眺めていると、一軒の小さな花屋が目につく。一番目に焼き付いたのは、ピンクと白でよりどりみどりに飾られた清楚なスイトピーの花束。他にも情熱的に真っ赤なバラや、時期外れな夏らしさを司るひまわりも売っている。小さな店なのにわりと花の種類が多くて、思わず足が立ち止まってしまういそうなほど魅力的な花たちがたくさんあった。

「きれい……」

思わず囁くような小さな声で呟いた。しばらく歩きながらでも花にうっとり魅入っている自分からハッと我に返る。まるで今の態度と言動は、花を買ってほしくて物欲しそうにしてる様に見えるのではないか。そこまで意地汚い人間ではないと思いたくて、颯馬さんの顔をちらつと見る。すると私の視線に気が付いたのか、横顔が段々ニヤニヤという擬音語が似合う顔に変化していく。

「ん、どうした？ 俺にかまってほしいのか？」

「ち、違います！」

どうしていつもそういう系に引つ張っていきこうとするのかな。でもその様子だと私のさっきの言葉は聞いていないみたいだし、さっきの態度も見えていないみたい。それだけでもよしとしよう。

花屋を通り過ぎて、一分後のところでようやく着物が売っていると思われるお店に到着した。正直、これ結構な運動になったんじゃない？ 約二十五分間もウォーキングしたようなものだし。最近、運動不足で体力不足だったし丁度いいかもしれない。でもそのおかげで筋肉痛になるわ。私ってかなり動かなさ過ぎなのかも。まあ運動にはなったし、健康的だよな。

ちよつと得したと喜びながら、店内に足をまたぐ。そして私は驚いて目を丸くする。やけに広くて大きい店だから、着物以外にも何か色々雑貨とかも色々売っているのかなと思っていたのに、着物がほとんどを占めている。さすがに着物だけじゃなくて、草履とか巾着袋とかも売っているけれどやっぱり着物がほとんどだった。これはすごい。着物の種類もたくさんある。これは選り甲斐があるわね。

「ここなら、自分の気に入る着物もあんだらうよ」

「すごいですね。こんなに種類があると、選ぶのにかなりえらく時間がかかりそうです」

これだけ着物の種類があると、本当に全部の着物を見終わるまで一時間は絶対にかかるそう。その中から自分の気に入った着物を選ぶのにもまた時間がかかるだろう。安いものならどれでもいいとは思ったんだけど、でもここまで来るとそんな事なんて関係ない気さえ

してきた。うーん、多分、いや絶対に選ぶのに時間かかるよね。そこまで長い時間颯馬さんを待たせる訳にもいかないしな。着物の種類が少ないのも困るけれど、多すぎるのもそれはそれで別の意味で困る。どうやって選ぶのかと心の中で迷っていると、

「しょうがねえな。俺が特別に見立ててやるよ」

と颯馬さんがかなり意外な事を言い出してきた。私はてつきり勝手に選べとか言ってくると思ったのに、一体どういう風の吹きまわりだろう。あ、でもさっきの白いフリフリのエプロンを自ら着るあたりから予測すれば趣味とか悪そう。てか微妙だと思う。選んでくれるのはすごく嬉しいけど、問題は別のところにあってそれはそれで心配かも。とりあえずは選んでくれるみたいだし、選んでもらおうかな。

「い、いいんですか？ でも、やっぱセンス悪そ……」

「何か言ったか、楓ちゃん？」

「め、滅相ありません！ むしろお願いします」

いけないいけない。一瞬心の中の口が滑りそうになっただわ。言っている事と悪い事があるよね。何かほんの少しだけ颯馬さんから殺気が見えたもの。今もしも、最後まで余計な事も言い終えてたら間違いない私に明日はない。

「おまえ、何色の着物がいいんだ？」

「え、別に何でもいいですよ？」

こう見えても私、結構ダークな色が好きだったりするけれども……。ピンクや赤よりも青や紺の方が好きだし。でもせつかく颯馬さんが見立ててくれる訳だし、たまには気分を変えてみるってのも悪くないか。この際、何でもいい。と思いつつも何だかんだでどんな着物をチョイスしてくるか楽しみなんだよね。

「柄、どんなのが好きってのあるか？」

突然そんな細かい事まで質問するとは思っていなくて戸惑う。周りを見渡してたまたま目にした着物の柄を咄嗟に口にする。というか一応私の希望も聞いてくれるんだね。妙に律儀だねこの人は。

「えーと……花柄……とかですかね」

「分かった。ちょっと待つてる」

まるで最初から目星をつけてたかのように颯馬さんはささっと一気に三着の着物を持ってきた。早すぎるでしょう。もしかして私の希望を聞く前から、すでに選んでたのかな。だったら私に聞かないですよ。

「これと、これと、これはどうだ？」

店内の中心にある大きなテーブルに、一着ずつ広げる。一着目は鮮やかな赤い下地に紫や黄色の花がしるされている女の子らしい着物。二着目は純白の綺麗な白の下地に水色の薔薇がちりばめられている、とても風流で涼しいそうな着物。三着目は濃い桜色に赤や黄色や白の色とりどりの花の刺繍が施されている可愛い着物。どれもとても綺麗な作りの着物で目移りしてしまう。

「……か、かわいい……」

「俺が選んだんだから、あたり前だよ」

「そ、そうですね……」

若干呆れながらも、颯馬さんの意外なセンスの良さに驚いた。もしかして女物の服を選ぶセンスとかがいいのかも。それはそれで気持ち悪いけど。でもこれはこれで迷うわね。どれも可愛いし。うーん、こういう時は試着してみた方がいいのかな？ 私が着てみて颯馬さんの感想を聞いてそれで決めてみるのもいいかも。

「これ全部試着してみたいですか？」

「ああ、着てみて良さそうなのあったらそれにするか」

まずは一着目の赤い下地の着物を試着してみる事する。何か少し派手な気がするんだけどね。でもせっかくだから、着てみたい。

お店の店員さんに試着室で着付けをしてもらう。着物ってこの帯がすごくキツイのよね。綺麗で清楚で和風な感じがするからすごい憧れるけど、その分着ている時が苦しいし蒸れる。

着付けが終了して試着室から出て行くと、颯馬さんがすぐ近くで待機していてくれた。颯馬さん何て言うだろうな。少し緊張しつ

つも、どんな反応してくれるか楽しみだったのだが、

「馬子にも衣装ってやつだな」

と冷たく言い放たれた。

「言うと思ってましたけれども、でも、もっとうとう、別のを期待してたんですけど……」

半泣きになりながらも私は次の二着目の純白の白の下地に青いバラが散りばめられている着物を試着する事にする。正直言って私はこっちの着物の方がお気に入りかもしれない。風流で涼しそうな感じがたまらない。そもそも私青系の色大好きだから。何か一々着替えるの面倒くさいから、もうこれにしちやおうかしら。とりあえず着てみて颯馬さんの感想もらってからにしよう。また試着室に戻り、着付けをしてもらう。ぼんやりと着付けしてもらうのを眺めていると、店員さんが何やら白いリボンのようなものを引っ張り出してきた。何に使うんだろう。

「ねえ、あなた、髪飾りとしてこのリボンしてみない？ その着物に合ってると思うわ」

「いいんですか？ なら、お願いします」

やった。予想外の展開だけど、願ってもいない事に嬉しさを覚える。店員さんが髪の毛をしばっているゴムの上から、リボンを巻くように結ぶ。何かすごく大きなリボンだな。きゅっとリボンが締まる音と共に店員さんの「出来たわよ」という声が重なる。

試着室から出てみたが、颯馬さんの姿が見当たらなかった。どこに行っただのかと、辺りをキョロキョロと見渡していると、バタバタと慌しい足音が聞こえる。その足音は私の目の前でぴたりと止まり、驚いたような顔をしてからいつもの憎たらしい笑顔に変わり一言ことう言った。

「……似合っじゃねえか」

「は、はい……」

素っ気無い言葉しか出なかったのは恥ずかしかったから。こんなに息を切らせて一体どこに行ってたんだかね。気のせいじゃなければ

後ろに隠すようにしている大きな紙袋が見えるんだけど。何か買いたいものでもあったのかな？

「それにしまえば？」

「はい、そうします」

私が笑いながら頷くと同時に、颯馬さんは財布をどこからかともなく出す。こんな素敵な着物を買ってもらえるなんて、私贄沢かもしれない。最初は安物で着れさえすればいいやって思ってたけど、何だかんだで結構な良い値段な着物を買ってしまっただの。何でも颯馬さんが選んでくれたわけだし、それにそんな事関係ないよね？ 自分に言い聞かせながら、家路は買ってもらった着物を身にまとい帰る。これ言うとは色々台無しんだけど、着物ってかなり歩きにくい。転んだりとかしたら着物汚れちゃいそうだな。気をつけて歩かないと。

「ちよつと休むか？」

着物の歩きにくさに苦戦しているのを理解してくれたのか、颯馬さんは広くも無ければ狭くも無い普通の公園のベンチを指差した。…あれ？ 私今少し既視感みたいなものを感じただけ。何かこの公園来た事があるような気がする。気のせいだと思いたいけど、結構新しい最近の記憶だった。

「わ、私この公園に来た事ある気がしなくもないんですけど……」

「そりゃ、そうだろ。お前、ここで最初倒れてたんだぞ？」

あ、そういえばそうだった。颯馬さんに言われて少しづつ忘れかけていた記憶の鍵が見つかった。この公園は私がこのよく分からない世界に迷い込んだ時に、初めて瞳に焼き付けた場所で颯馬さんに初めて会った場所でもある。通りで既視感を感じると思ったわ。

「あ、そっか。この公園で颯馬さんと……」

「なんだ、俺と出会った時の頃でも思い出したのか？」

意地悪くからかう颯馬さんに抵抗したのだったのにまさに凶星だったので、何も言葉にださずに首を縦に動かし頷く。そのまま黙ったまま公園に足を踏み入れて、適当に出入り口に一番近かったベンチ

に二人で座る。何か言えば良かったんだろうけど、提供出来る話題が無かった。しばらくの間、沈黙という名の気まずい時間が流れる。颯馬さんも黙ってないでしゃべってよ。

「お、そうだ。ほら、これやるよ」

私の心の中をさとすように、颯馬さんは沈黙を軽々しく破ってくれた。そう言うと同じに、今まで後ろに隠すように手にぶら下がっていた紙袋を私の目の前に出す。さっき急いで何やら買っていたと思えるのは予測してはいたのだけど、まさかそれが私にくれる贈り物だとは思わなかった。颯馬さんって結構洒落た事するんだね。でも、何か嬉しいかも。

「ありがとうございます」

精一杯の嬉しさの意味を込めて、お礼を言う。かなりの期待を胸に紙袋に入っていた代物はピンクと白で飾られている色とりどりのスイトピーだった。このスイトピーってもしかして、いやもしかなくともさっきの花屋で売っていたスイトピー？ 突然の出来事に頭が付いていなくて、疑問ばかりが頭に残る。

「俺からのプレゼントなんて滅多にねえんだから、ありがたく受け取れよ」

「え？」

気付いてたんだ。私がこのスイトピーの花束を見てた事気付いてたんだ。プレゼントしてくれた事もすごく嬉しいけど、それよりもあれだけ花屋にたくさん花束が飾られていたというのに、私が欲しいと思っていたこのたった一種類のスイトピーの花束を分かってくれた事の方が嬉しい。これ以上何て言ったらいいか分からないけど、本当に嬉しいし感謝の気持ちで一杯一杯で胸が熱くなる。本当は嬉しいって気持ちを伝えたいけど、何故か緊張して言葉が出なかった。ちゃんと伝えたいのに、自分が情けない。

「そっぴや、スイトピーの花言葉って知ってるか？」

「知らないです。教えてくださいよ」

「バーカ、教えてやんねえよ」

「は？」

何だそりゃ。聞いといて教えないって幾らなんでもひどいじゃないか。なら、もういいし。そんなの人に聞かずに自分で調べろって事なのね。はいはい、分かりましたよ。調べればいいでしょ、調べれば。半分やけくそになりながらも、颯馬さんのニヤニヤした大人の余裕ぶる笑顔を拝む。何かやる事成すことが颯馬さんは素直じゃない。でもそれはお互い様ってところかな。そういえば私、花束なんて今までもらった事無かったな。その前に今時、花束をプレゼントするなんてキザな行為はなかなかしないよね。けどそのキザな行為の中に含まれている優しさが私は何よりのプレゼントだな、と恥ずかしい事を考えながら私の苦難の日々は続くであろうと思つ今日この頃だった。

第三章 ? 【優しい顔】(前書き)

とりあえず、途中までUPします。

第三章？【優しい雨】

座って見える窓越しから覗く空はまだ昼間にも関わらず薄暗く、雨雲しか存在しない。地面を覗いてみれば大きかったり、小さかったりする水溜りが転々と広がっている。どこを見渡しても一面、雲が空から地面に落ちていている光景しか見えない。

静かな時間の流れに身を任せて聞こえる雨音は、時間が夜に向かうにつれ増えていき激しさが増していく。しとしと、と降る雨は室内にまで影響し、あちらこちらがベタベタと湿っており蒸し暑い温度をかもし出していた。

道端に咲いている湿ったあじさいを眺めながら、私は本日何回目か数え切れないほどの大きなため息をついた。

「はあ……」

第三者から見て気の抜けそうなため息をする原因は、まさにこの雨のせいだった。

現在の暦は六月下旬である。そしていわゆる梅雨という時期でもあった。毎日のごとく雨が降っており、洗濯物も室内乾しでなかなか乾かない。外出すれば車によって水溜りに溜まっている水が、私目掛けて飛び散ってくる。室内もベタベタと湿っていて、無駄に暑いというメリットが全く感じられない時期だという事が、私にとってはとても大問題なのだ。

いわゆる雨が超がつくほどの雨嫌い。確かに雨が降れば、水不足も解消されるだろうけど、大量の雨が降れば土砂崩れだって起こるだろうし、川の水が溢れて大洪水が起こる事だって充分に考えられる。私が言いたいのはメリットがあればそれだけのデメリットが生じるということだ。

だから雨なんて一ヶ月に三回ぐらい降れば、地球はバランスよく成り立つと考えられるのに、なぜ神様は梅雨なんて時期をくれたのだろう。神様は随分と人間には厳しくしてくれたものだ。

私は、朝起床した時間から時々窓の前に座り込んで外を見ていた。せめて少しだけでも雨が止まないかな、と小さな期待をもっている。テレビで見た天気予報では、午後に晴れるなんて言っていたけど、そんな気配は全く有り得ないほどの雨量だった。

朝からずつとため息の連続。本当に幸せがどこかに行っちゃいそうなくらい、憂鬱なため息で気が滅入る。

雨についての愚痴しか言葉に出来ずにいたが、今はもう六月下旬でこの家に居候してから早一ヶ月も経ってしまったのだった。すぐにでも出て行ってやろう、と計画してはいたのだが、元の世界に帰る術は何も見つからない上に、この変な世界で他に住む場所の当てがなく現在に至るわけなのだ。

まあ、別に元の世界に帰ってもいつも通り学校へ行って、勉強するだけなのでこの現状は正直もう慣れてしまい、もうどうでもいいかな、なんて有るまじき事を考え始めていた。

まだ当初の頃は少しだけ何とかしなきゃ、なんて全力を尽くしてきた。それでも結構冷静でいられた事にかなり驚きつつあったりする。もう少し驚いて慌てて、元の世界に帰りたいと思える感情性豊かな人間になりたかったものだ。いわゆる自分は物臭さな人間なのです。

「ふう……」

それにしてもよく降るわね……。今まさに腹の虫が煮えくり返っている状態だよ。ああ、もう早く止まないかな。おまじないとか信じてないけど、照る照る坊主でも作ってみようか、なんて思っている。と誰か人がこちらの方向へ向かってくる気配と足音が聞こえる。

「何しけた顔してんだよ」

窓の前でじつと座っていた私の上から、この家の主である神崎颯馬さんの声が降ってきた。だけど、今の私は完全にイライラモードなので必要な一言だけをこぼす事にした。

「雨のせいです」

少し引きつった愛想笑いで即答をすると、颯馬さんはわざとらしいため息をつきながら、呆れたような目つきを私に向けてくる。

「よつこいしょ」という掛け声と一緒に胡坐を掻いて座ると呆れた目から、睨んでいる目が変わっていった。

「おまえ、何イライラしてんだ？」

「だから、雨のせいです」

その一言の一点張りで、機械のように言葉を発する。また同じこと聞かれても、ずっと「雨のせいです」とだけでも言っておこう。颯馬さんの質問は軽く流して、少しでも雨が止むようにお祈りをしようとする。

「……雨嫌いなのか？」

「嫌いです、もうね、本当に嫌いです！　あり得ないじゃないですか！　雨って何？　おいしいの？」

雨という単語を聞いただけで、頭に血が上ぼって声を荒げてしまうくらい嫌い。気持ちまでもが辛気臭くなる。

「おい、キャラが崩壊してんぞ。それとも俺に対する嫌がらせか？　邪悪な引きつった笑顔を見せてくれる颯馬さんに対抗して、私は眉間にしわを寄せ、ぶすつとした表情を作る。そして地声よりも低く、冷徹で冷蔵庫よりも寒い声色を発そうと口を開く。

「はい。というわけで、今話しかけると些細な事でも絶対怒るかもしれないので、話しかけないで」

「ほお？　そんな事言ってるのか？」

私の冷たい無愛想な一言で、さらに一層引きつった笑顔……もはや笑顔と呼べる代物じゃない颯馬さんは私に対抗してか、いつもより倍も低すぎる声で疑問符のくっ付いたものを言い放った。

そしてニヤリと魔王が悪い事を企んだかのような怪しい笑みを浮かべると、これから厳しい言葉を吐き捨てやろうという雰囲気を出し始めた。

「俺は？　一応？　こう見えても？　この家の主だから、雨の中にお前を投げる……じゃなくて、ゴホンッ！　……追い出してもいいんだけどなあ」

「え？　あれ？　今さり気に恐ろしい事言わなかった？」

聞き捨てなら無い動詞に、敬語を使うのを忘れるくらいに動揺する。何となく咳払いして誤魔化してたけど、投げるとか非現実的な事を口走らなかつた？

颯馬さんの目が今までに見た中で、真剣だったから余計恐ろしい。この人、本当に雨の中に私を投げ捨てる気ではないのか……。

とりあえず現在一番最優先するべきなのは、自分の居場所確保なのだろう。その為には颯馬さんに謝らないといけない。決して先ほど私が冷たく放った言葉を否定した訳ではなく、ただ謝るだけだからお堅いプライドを一かけら捨てる覚悟をして、私は颯馬さんのさつきから何も変化のない邪悪な瞳を見るのを避けながら

「す、すみませんでした……」

と、ぼそつと呟くように言った。とても人に謝る態度では無かったのだが、私の性格を考慮してくれたのかそれだけで颯馬さんは頷いて納得してくれた。

「……つたく。分かれればよろしい。つか、俺だって雨は嫌いだったの全くだ」

いじける様に舌打ちをしながら、ブツブツと少しずつ愚痴を吐き始める。

あれ？ 私だって雨のせいでイライラしてるのに、颯馬さんの愚痴を聞く事に付き合わなきゃ駄目なの？

ただでさえじめじめしている部屋なのに、さらに他人のじめじめした愚痴を聞くのは最悪なんですけど。だけど、この場を無視してしまつと本当に雨の中に投げ捨てられかねないので、一応颯馬さんの顔に視線を向けながら適当に生返事しておく。

「ですね……」

「ゴミ袋を出そうと外に出たら、水ぶっかかるしょ。こっちが何だこれって感じだこのヤロー！」

聞いているんだか聞いていないんだか分からない返事にも関わらず、次々と颯馬さんの愚痴が零れ落ちる。確かに言っている事は十割くらい納得するけど、もう言わなくていいから。

早く颯馬さんの愚痴の蟻地獄から開放されようと、視線を窓越しに見える雨に移す。

「それはそれは大変」

もうどうでもいいので、返事は素っ気なくなる。素っ気ないどころか、台本に書いてある言葉の羅列を棒読みで読んでいるみたいなた詞を言う。

「だろ？ だからよ、俺も今は若干かなりイライラしてるわけだ」それでも一応聞いてはいたので、私の耳に届いてくる言葉にどのような返答するか迷う。

ただ感じた事は、日本文法が間違っってしまうくらい、怒っているんだと確信しつつ、とりあえず頷いところという考えがピンと頭に舞い降りている。

「はあ……、仕方ねえな。ちよっくら犬と戯れてくるぜ」

私に愚痴をこぼしても無駄だと思ったのが、大きなため息をつくと床に座っていた大きな体を立たせると、どこかへ行こうとする。

「はい、いつてらっしゃい……ん？ ……って、え？」

時間差の反応に自分で呆れながら、颯馬さんが呟いた言葉に脳内で疑問を抱え始める。分からない事があつたり、疑問があつたら質問して聞く事に限る。そして私の納得出来る答えを求めよう。

自分の心の中で頷くと、立ち上がった颯馬さんを引きとめようと私は座り込んだまま着物の裾を掴む。

「今、何と言いましたか？」

「だから、犬と遊んでくるって言ってんじゃねえかよ」

「え……？ 犬？ 犬……？ 犬いるんですか？ どこに？」

疑問符が大量に付いている言葉を何度も発する。私の心の中にあるモヤモヤな気持ちを確かめたい。

「ああ？ この家にいるけど？」

「ええええ！？ なな、な、何ですか、それ！ めちゃくちゃ初耳じゃ……ないですか！」

驚きの声が大口を開けて出てくる。口をパクパクと金魚みたいにさ

せながら、次の言葉の繋ぎ目を発するのに一苦労した。

「あ？ 言つてなかったか？」

「言つてませんよ」

私がいびしゃりと即答すると、後頭部を右手で掻きながら颯馬さんは少し驚いた様な目をする。私の顔を不思議そうに眺める。

「気付かなかつたのか？」

「気付きませんよ」

「鈍感」

ボソリと不愉快な単語が呟かれる。プチッと私のプライドに触る音がした。口元を引きつらせていると、颯馬さんが仕方がないと言わんばかりのため息をつく。

「じゃ、見に行くか？」

「はい」

立ち上がり、雨の降る景色が見える窓を後にする。颯馬さんの足跡を追うように、私はひたひたと付いていく。あまり自分が歩くことのない廊下に、不思議を覚える。キョロキョロと周りを見渡していると、颯馬さんが立ち止まり、引き戸をガラッと一気にあける。

「わ、あ……かわいい」

「ワンッ！ ワンッ！ー！」

扉の先には茶色、黒色、……ざっと見て六匹ぐらいの子犬達が集まっていた。

「だろ？ 俺が豆に手入れをしてるからこの通り、手触りがふわふわだ」

自慢げに話している颯馬さんを軽く聞き流していると、足元に子犬達が寄ってきて、しっぽを振っている。何とも愛らしい。そして颯馬さんの言う通り、毛並みがとてもふわふわしていて、手で触れていて心地が良い。

「ワンッ、ワンッ！ クウーン」

「か、かわいい……ですね」

小さい子犬たちが、しっぽを振って、まだ幼い小さな鳴き声で上げ

たら誰だっかわいいと思っってしまう。

私は子犬達と視線を近くするため、子犬たちをもっと触るために膝を曲げて屈む。

「これ全部飼ってるんですか？」

今までこれだけの子犬がいて、気が付かなかったなんて不覚すぎる。あまり行く事の無い部屋なんて、目も向けないからね。今度から色々と目を光らせて見てみよう。ああ、でも居候している身で人の家を覗くのは失礼か。

「まあ、全部飼って、るな……」

どことなく悲しげで、うつむいて言いずらそうに話し、言葉に詰まる颯馬さんなんてめずらしい。きつと何か言いたくない事情でもあるんだろうか。

私はこの話題は控えるべきだと直感で悟り、立ち上がった空気を変えようとす。

「へえー。かわいいですねー」

「……飼ってるっつーか……拾ってるんだよ」

「……」

一瞬、沈黙が走る。

小犬たちも静かな空気を感じているのか、黙りこくった。

「……拾ってる？」

私が話さなければ、沈黙は取り壊されない気がした。素直に思った事を口に出す。

「ああ。こいつらは全員捨て犬だった」

「……」

黙って私は頷く。深刻に、真面目な様子で語る颯馬さんを見て戸惑っってしまう。

頷くことしか、私にはどういう風に反応すればいいか分からない。

「だから俺は、拾ってきたんだが……逆にこんな狭い部屋に押し込めて悪い事しちまったな」

自嘲気味に颯馬さんは薄く笑う。私は自分に対して自己嫌悪に笑っ

ている颯馬さんを初めて見た。

颯馬さんを黙って眺めていることが辛くなっていた私は、気付かぬ間に口を開いていた。

「そ、そんな事ないと思います……けど」

「……？」

颯馬さんは私の発言を、不思議そうな顔を見せながら聞いている。

私はそのまま話すのを続けた。

「だって、颯馬さんが拾ってくれなければこの犬たちは、どうなっていたんだろう」

私は言葉を詰まらす事なく、述べる。まるで最初からそう思ったかのように。

「私もそうなんです、食べるものや住む所を提供してくれてこんな……あの……面倒見の良い人に拾ってもらって……こんな幸せなことってないと思いますけど……って、何言ってるんだ。何か偉そうな事言ってますいません！」

一人で一方的に語ってしまい、羞恥心が湧き上がる。これ以上、何か言わないように両手で口を押さえる。少し話し過ぎたかもしれない。

そうベラベラと言葉を紡いだ事に後悔を積み立てていると、颯馬さんは私の頭に手をポンツと優しく置く。

「ありがとな」

微かに笑いながら颯馬さんは、私の頭をかき回すように撫で始める。「……そ、そんな別に……」

先ほどの後悔がどこかへと失せるような笑みに、私はどっちにしろ恥ずかしくなる。

「つか、へえー？ 俺のこと面倒見の良い人だって思ってたんだな？」

そして、さっきの微笑みはどこへ行ったのやら。ニヤニヤと意地悪な笑みに変わる。

「あ……い、いや、なんていうか、全然そういう意味と違いますけ

ど。お節介だなと思ってるだけですから？」

自分でも素直じゃないって思う。だれど、いつもの颯馬さんに戻って良かった、なんて思ってしまったりする。何だかんだでいつものニヤケ顔を晒している颯馬さんの方がいいかも、と考えてしまう。

「ふーん？ ま、そういう事にしといてやるよ」

頭を撫でていた手をそつと離す。全く、髪がぐしゃぐしゃになっただけじゃないの。

髪を手ぐしで軽く整えて、子犬たちを触るために再び屈む。

「あ、あの、この子犬たちの名前って何なんですか？」

さすがにずつと“子犬”と言いつけるのも可哀想なので、颯馬さんに尋ねる。

「えっと、この茶色がタローで、この白いやつがジローで、黄土色の犬はサブローで、こいつがシロー、そんでこいつはゴローだな」

順々に犬を手で指していき、名前を言っていく。確かに覚えやすい名前だけど……。

「……ベタな」

私は本音を颯馬さんに聞こえないようにボソリと呟いた。

子犬達と戯れた後、私と颯馬さんは雨がまだ降り続ける中、仕方なくお店を開けることにした。颯馬さんは『一応、来るかもしれない』と言つてたけど、私はどうも期待できない。この湿っぽい雨が止めば別の話だけど。

「ただ、私が絶対来ないと宣言すれば、

「照る照る坊主でも作るか」

突然、前置きもなく発言してきた。一体何を好んで、てるてる坊主なんて作るんだ。これ言ってしまうと子供の夢を壊すかもしれないけど、てるてる坊主なんてただのティッシュの無駄使いだよ。地球に優しくないんだからね。

「いい大人がそんなもの信じてるんだ……」

ぼそりと私は呟く。聞こえるようにぼそりと。颯馬さんを哀れむような目で見る。

「それは独り言なのか？ 独り言で言ってるんだよな!？」

めずらしく声を荒げながら、突っ込んでくる颯馬さんを内心ニヤけながら眺める。もちろん私はニッコリと笑いながら。

「もちろん独り言ですよ……?」

「何だお前、喧嘩売ってんのか？ なら、喜んで買ってやるぜ?」

「遠慮します。そんな事より本当に照る照る坊主作るんですか?」
颯馬さんが私が冗談で売った喧嘩を、本当に買いそうだったので、きつぱりと即答し、さり気なく別の話題にすり替える。

「あ? ああ、まあ作るか」

微妙に納得出来ないばかりの、表情をしながらも、颯馬さんは頷く。私も颯馬さんに釣られて頷き、テッシュ箱を取りに行こうと足を動かす。

「照る照る坊主って、これテッシュの無駄遣いですよね……」
遠くを見るような眼差しで私はテッシュ箱を見つめながら、軽いため息をついた。まあ、今はテッシュだってたくさん生産される時代だから構わないと思うけどね。

夢の無い現実味を帯びた私の発言に幻滅したのか、呆れたのか、颯馬さんはハァーと声に出してため息を付くフリをした。

「おい、お前はもうちょっと夢のある事言えねえのかよ?」

「そんな本当の事ですし……、それに……何でもありません……!」
「それに?」

「……」
余計な事を話そうとしたので一旦中断させようとしたのに、続きの言葉を催促され戸惑い黙る。何でもないと言っただけなのに、何故そんなに聞こえたりするのだろうか。颯馬さんは少しデリカシーを学んだ方がいい気がする。

「……なんてな。別に無理に聞こえなんて思っちゃいねえよ」

後ろを向いて答えた颯馬さんの明るい声は、室内に大きく響いた。

私も次に何を言えば迷い、慌てるだけで黙った。雨が地面に落ちる音だけしか聞こえなくなる。

話すだけではなく、動くことも気まずくなる。颯馬さんも動こうとしない。表情も後ろを向いていて、よく分からない。どうしたらいいんだろう……。

沈黙が何秒も続くのは耐えられない。そう思った私は颯馬さんの「それに？」を答えようと口を開くことにした。

「それに、照る照る坊主があっても、晴れないことってあるじゃないですか……」

私の声は予想以上に大きく反響した。シリアスのような空気に、なる。「……かもな」

颯馬さんは小さな声で否定はせず、私の話を肯定する。そして私にとびつきりの笑顔を見せてくれた。

「けど、晴れた時はすげえ嬉しくねえか？」
「……嬉しいです……けど」

「それで充分じゃねえか」

私はこの人から真面目な答えが返ってくるのは、初めてだった気がする。短い一言でこんなにも心が安らぐ事であるんだ……。

第一印象はただの変態かと思ってたけど、颯馬さんと同じ時間に触れるたび、私の心が安らぎ落ちていくのが分かっってしまう。

ただ安らかな気持ちとは裏腹に、先ほど颯馬さんが垣間見せた笑顔が過ぎり顔が熱くなる。顔から火がでているみたい。

「それでは、早くてるてる坊主作りましょう！こ、こんな雨がやむように……！」

赤面している顔を誤魔化すかのように私は、大声で叫ぶように言い放った。

「そうだな」

また、満面のニコツとした顔を見せる。

「テッシュ箱、持ってきますね」

颯馬さんの顔を見るのが気恥ずかしくて、くるっと後ろを向きテッ

シュ箱のある場所へと向かう。テッシュ箱を三箱を両脇に抱えて持ってきて、レジにどさつと一気に置く。

「輪ゴムも必要……だな」

颯馬さんが輪ゴムを探す動作を開始すると同じく、私はレジの下の右から二番目の引き出しに入っている輪ゴムを奥から取り出す。

「お前何気に、俺よりか物の在り処を把握してるじゃねえか」

「伊達に二週間もコキ使われてませんか。いずれは金庫の場所やその暗証番号まで分かっちゃうくらいになるかもしれないね？ そんな事になりたくないと思いましたが、少しは私を休ませてくださいよ？」

ニタアという顔で、颯馬さんに壮大な嫌味をぶつける。たまには意地悪して、颯馬さんの悔しがる顔を拝んでみたいものだ。けれどもそれがなかなか隙が付けなくて未だにこの人のペースに挟まっているから困ったものよ。

「金庫の傍の掃除以外で、これからもたっぷりコキ使ってやるよ」
「……は、い」

私の嫌味を反撃しやがった。最初からこの人に勝てるとは思ってないと分かっていたけどさア……。もう少し私の立場を与えてくれてもいいじゃないかな。まあ、居候な奴が何言ってるんだろっね、本当について言われるけどね。

最初から颯馬さんの嫌味ビームに勝てるわけ無いと頭で再確認つつ、素材がテッシュのてるてる坊主を作り始める。

「つか、テッシュ三箱って、てるてる坊主を何体作るつもりだ」

「つ、作れるだけ……ですかね？」

我ながら、テッシュ箱三箱は持っていきすぎだろうか、とは一瞬考えただけどやっぱりそうよね。もう作りたいだけ作ればいいじゃない。「いい大人がそんなもの信じてるんだとか言いつつ、お前が一番信じてるんじゃないかねえの？」

笑っている口元から見える白い歯が憎たらしい。信じてるわけじゃない。小学校の遠足の時だって、天気予報で雨が降ると予報し

ていたから、てるてる坊主五個くらい作ったけど結局晴れなかったし。まあ、自分が信じないと断言するのは体験したからだけだね。

「だから、信じてませんよ」

「どうだか？」

ニタニタ。ニヤニヤ。

まさにニタニタ、ニヤニヤという効果音が似合う顔をしてくれる。

反論しようと思ったけど、もう一々反論してもどうしようもないからやめとこう。どうせ、また何か言い返されるだろうから。

私は颯馬さんを無視して、黙々とてるてる坊主を作る作業に取り掛かる。

「出来ました」

「おー、俺も出来た。じゃあ入り口の所にもぶらさげるか」

てるてる坊主の首にひもを結んで、のれんの様に入り口に引き戸の上に括りつける。

てるてる坊主がお客さんを迎え入れるかのように。

「よし、これで晴れると嬉しいですね！」

「だな」

私と颯馬さんがてるてる坊主を飾って少し満足感にひたっていると、窓から光が差し込むのが見えた。

これは、まさか……。

そしてそのまさかと思った事が、現実となったのはすぐだった。

窓からまぶしいくらいに光があふれ、私と颯馬さんを照らし始める。漫画みたいなタイミングだけど、てるてる坊主を飾った瞬間に晴れた様だった。

「……まぶしいですね」

「ああ、まぶしいな」

太陽の光のまぶしさに目を細め、私はかすかな声で言った。颯馬さんも私と同じく、目を細めて言った。てるてる坊主なんて晴れたらラッキーというぐらいの御まじないだったのに、こんなに早く晴れてしまうと少し複雑かもしれない。早すぎて喜んでいいのか分から

なくなる。

「お客さん来るといいですね……」

「来るといいな……あ」

颯馬さんは何かを思い出したような顔をした。

「ん？ どうしました？」

「久々に晴れたし、犬の散歩してえな」

窓から見えるまぶしい光を見ながら、颯馬さんは呟く。

「行ってくればいいじゃないですか」

「お前一人で店番頼むわけにはいかないだろ。レジ打ち出来ないし」

「じゃあ、仕方ないですね」

ああ言えば、こう言うので、人の提案に対して文句ばっか言って、かなりムカつくんだけど、どうしたらいいんだろう。

「代わりにお前が行って来い」

しかも結局は私に頼むんかい。面倒くさいけれど断るわけにもいかない。でも、ほんの少しだけ抵抗してみようと思う。

「……私あまり遠い所まで散歩出来ませんよ？」

「近くでいいぜ」

これは行くしかないな。心の中でため息をして、諦める。まあ、ここは逆の発想をしよう。犬の散歩に出掛ければお店の手伝いはサボれるわけだ。

「……分かりましたよ。居候している身で口答えするのもアレですしね」

ブツブツと文句を言いたい気持ちでも、とりあえず犬のいる部屋へと階段を上り、重い足取りで向かう。引き戸を開けると、子犬たちが私の足に向かって飛びついてくる。犬の頭を撫でてから、私は犬の首輪とリードを探す。

「颯馬さん！ 犬の首輪とかリードとかは、どこにあるんですか！」

颯馬さんの耳に聞こえるように大声で叫ぶ。

「右の棚の上に置いてある！」

颯馬さんの返答通りに、右方向にある棚の上を覗いてみる。そこに

は当たり前前の様に、犬用の首輪とリードが置いてあった。

「あ、あったあった」

手でそれらをむんずと掴むと、犬を連れて階段を下りていく。子犬たちは階段を下りるのが苦手らしく、私の後にはついてくるものよたよたと歩いてくる。ちよつと可愛い……。

「あはは、大丈夫？ ゆつくりでいいよ」

少々時間はかかったが、無事に階段を下りることが出来て胸を撫でおろす。

外へと繋がる出口に進み、引き戸を開ける。子犬たちが先に出るのを確認して、私は颯馬さんに出掛ける合図を声にする。

「それでは行ってきます」

颯馬さんは片手をひょいっと軽く上げると、ニコツとした笑みで送り出してくれた。

「おお、行ってらっしゃい。なるべく早めに帰って来いよ」

ここで戸を閉めた為に颯馬さんの顔が見えなくなった。

とりあえず散歩すればいいんだろうけど、どこで散歩すればいいかが全く分からない。

さすがに颯馬さんの家をぐるぐる回るだけなのは駄目だろう。どこどこへ行く当ても無い。

「さて、どこ行けばいいんだろ……」

「ワンツ！」

質問に回答してくれてるかのような鳴き声に私は、苦笑いをする。

「公園に、行く？」

あまり遠くには行けないけど、私が唯一遠くと呼べてたくさん遊べる場所はそこしか思いつかなかつた。

颯馬さんと私が出会った場所でもある公園。

「ワンツ！！」

Yesという返事かNoという返事かは分からないけど、元気よく吠えたからきつとYesの方だろう。

私は犬の返事を勝手な解釈で捉えると、早速公園に向かうことにした。

〈続く〉

第三章 ? 【優しい雨】 (後書き)

早めに投稿しなければと思い、若干手抜きですが…
多分読めないほどでは無いと判断したので、UPしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2784j/>

Feelings of mind

2010年10月16日09時49分発行